兵庫県現代詩協会

2023年12月1日 発行・時里二郎

会報54号付録・会報バックナンバー④

★第38号（2015年12月1日発行、8頁）

①〈イベント報告〉第7回「詩のフェスタひょうご」が10月4日神戸市中央区のラッセホールで行われた。第一部の講演は、佐木幹郎氏が「中原中也とチェホフをめぐって」をテーマに講演を行った。

③〈講演報告〉佐々木幹郎氏の講演要旨／報告者・大橋愛由等（別枠にて表示）

②〈読書会〉第7回読書会報告／テーマ「佐々木幹郎の詩精神について」チューター・季村敏夫

〈文字ではなく「声」を探して―〉報告者・福田知子

七月十八日、《詩のフェスタ》での佐々木幹郎氏の公演に先立っての読書会に参加した。チューターは季村敏夫氏。佐々木氏とは十九歳からの付き合いがあり、詩人としての客観視は困難としながらも、その詩精神について佐々木幹朗『東北を聴く―民謡の原点を訪ねて』（2014、岩波新書）をテキストに話された。

津軽三味線二代目高橋竹山とともに東日本大震災直後に被災地の村々を行脚した佐々木氏は次のように記している。「東日本大震災が起こったとき、わたしが一番欲したのは、東北の声を聴くことだった。濃密な東北弁の声を聴きたかった（中略）求めているのは文字ではなかった、あくまで、本能的に声を探していた」。

季村氏は「声は、〈聴こえる〉ものではなく、聴こえないものに潜む。声（沈黙）を聴きとる、こういい換えてよいとおもう」と述べられた、テキストで佐々木氏はノヴァーリスの詩「すべての見えるものは見えないものに／聞こえるものは聞こえないものに／感じられるものは感じられないものに／付着している（以下略）」を引用しているが、これらの言葉がこの旅を通じて一層身に染みたのではないかと。

また本書で佐々木氏は、「ノヴァーリスをもじって言えば、想定できないもののなかに《付着している》ものをこそ、わたしたちは見つめねばならないし、そこでの想像力を鍛えねばならないのである」と述べている。季村氏はこうした声を「沈黙」と捉え、聴こえない東北の声は沈黙のうちに潜み、この沈黙の声をどう考えるのか…文字のない時間の方が文字のある時間よりも圧倒的に濃密であったことを、例えば、本居宣長を巡っての江藤淳と小林秀雄の対談から、あるいは、武満徹の『音、沈黙と測りあえるほどに』（1971、新潮社）から、また太田省吾の沈黙劇「小町風伝」「水の駅」を取り上げながら、「人間はしゃべらないことが常態であり、言葉をもたないことに本質的な在り方がある。荒野の中にコロンと横たわる石や黙って死んでいく牛…こられは人間の本質を裸像としてあらわす」と語られた。

さらに、詩語の在り方として、「世界（他者との交通の場）にさらされながら、訪れる者との対話」こそが詩のことばではないかと。佐々木氏のリーディングの現場に際して、次のような書き換えの指摘が印象的だった。佐々木幹朗「奇妙な果実」（詩集『砂から』2002年、書肆山田）の一節―「言葉をさがして黙っている誰かに伝えるためではなく誰にも伝えたくないから黙っている」⇓誰かに伝えるために黙っている（リーディングの現場へ。

この改作について、季村氏は「この書き換えに彼の世界に向かう姿勢が出ていると思う」と述べられた。ここでの「世界」はいうまでもなく先にあげた「他者との交通の場」であろう。

③〈追悼〉「梢に旅立つ」尾崎美紀〈長田弘追悼文〉

④〈追悼〉「伊勢田史郎のこと」直原弘道

伊勢田史郎は一九二九年生まれで、私より年上であったが、最近まで何度も私の病床に見舞ってくれたし、突然亡くなるとは思ってもみなかった。

私は、一九五七年に伊勢田史郎が属する詩誌「輪」に参加、「輪」が100号で終刊したのちも、伊勢田が発刊した文芸誌「階段」に協力し続けた。60年にわたる詩友である。

私の心に残っている彼の初期詩篇を探したのだが整理が悪くて見つからない。

処女詩集『エリヤ抄』は一九五二年で、第二詩集『幻影とともに』が一九五八年、この第二詩集の頃から彼詩法が確立されてきたの

③〈講演報告〉佐々木幹郎氏の講演要旨

詩を〈書く〉ことは〈待つ〉ことなのか　大橋愛由等

詩にまつわる見事な話法がつづられた。

一〇月四日（日）、神戸市中央区のラッセホールにて、「二〇一五年ふれあいの祭典・詩のフェスタひょうご」が開催され、第一部には、詩人・佐々木幹郎氏が〈「書く」こと、「待つ」こと―中原中也とチェホフをめぐって〉をテーマとする講演が行われた。

佐々木氏の語りは、〈書く〉〈待つ〉〈中原中也〉〈チェホフ〉という一見すれば別個のアイテムを、詩にかかわる人たちが集まる会場にふさわしく、詩にとってなにが重要かを中心に据えながら、この四つのアイテムを有機的に結びつけて話をつづったのである。

佐々木氏は、詩にとって大切なことをふたつ挙げる。

そのひとつは、幼児体験。「木を、〝木〟と呼び、かぜを、〝風〟と書くことを教えられる前の状態の新鮮な言語感覚。つまりどの人間においても、はじめて言葉にふれた幼児のように言葉を自由にあやつることができた時代」を忘れずにいることの大切さ。

ふたつめは、詩をいつ書くか、ということ。つまり〈いつ「書く」のか〉は、〈どれだけ「待つ」のか〉であり、その待つ時間がくたとえ「一瞬」であっても、そこに「待つ」時間がある〉と語った。こうした想いは、3・11東日本大震災のあとの詩情況から発想されたものだった。「なにか事件が起こった直後に言葉を発するということはどういうことか、もっと時間をかけるべきではないか、あるいは書かなくてもよいのではないか」といった議論があったなかで、「たとえすぐに書き出したとしても、その一瞬のうちには長い時間が含まれている」と考えるようになったのである。この書くことと待つことに関する所見は、小林秀雄の評論「無常といふこと」からの引用「僕は、たゞある充ち足りた時間があったことを思ひ出してゐるだけだ」との箇所と響きあっている。書くまでの待つ時間はたとえ短くとも〈充ち足りた時間があったことの思ひ出〉が含まれているのではないか。この小林の引用はさらに中原中也の詩「含羞」の中の「あゞ！　過ぎし日の　仄燃えあざやぐをりをりは」と響きあっていると指摘する。

そしてその中也である。佐々木氏は諳んじるほどに親しんでいる「曇天」の作品に言及する。「ある朝　僕は　空の下に、／黒い旗が　はためくのを見た。」と始まる詩である。この詩には「奥処」という言葉が登場する。フランス詩を訳出する際に「宇宙全体の奥底」という意味で中也が創り出した言葉である。

「曇天」にはこの「奥処」が意味するような天の上にある場所や、「かの時この時」に表わされている幼少時から今と往還できる時間帯、さらには解釈も分析も出来ない意識の状態などが、発見され呼び出されることによって、中也は詩を書くこと、つまり「待つ」ことを上手に思い出し内在化していると分析する。

では中也とチェホフはどこでどう結びついているのだろう。それは二年前に発見された中也の未発見の書簡と関連している。その書簡が見つかったのは、中也と親交があった安原善弘が住んでいた家からである。使用された原稿用紙、筆記具、独特の字のクセといったいくつかの要素から、中也が昭和九～一一年に書いたものと推定された。その推定にいたるまでの佐々木氏の解説はスリリングでかつ謎解きをしているようで聴く者を魅了した。

書簡ではチェホフの小説「黒法師」を読むよう中也は安原に薦めている。中也は自分を「天才」と思っていたこともあり、主人公である若者が、蜃気楼でしかない「黒法師」から言われた「あんたは正しく神に選ばれた人と称される少数の中の一人ぢや」との台詞にシンパシーを感じていたのだろう。それはひいては、「この世に受け入れられない創作者の孤独と、それに耐えられない者」としての自覚であった。この書簡からは中也が記憶違いも含めてチェホフを読み込んだ時間がうかがえ、その時間がすなわち〈書く〉までの〈待つ〉ことにつながってゆくのである。

〈第38号〉

だと私は思う。

どんなに暑い午後であったか
羊帳たる登路のなかば　の岩場で　男は
ひとり
檸檬を詔っていた
ひっそり　仰向いて　その果汁を啜っていた
陽炎　が
ゆらゆら　と
立ちのぼってくる

（以後略）

これは彼の詩語の典型とは言えないかもしれない。

しかし、モダニズムの影響を透過し、それから抜け出た彼の詩法を、想像してもらいたい。かれの詩法には、一貫して現実への認識とそれへの批評が隠されていたと私は思っている。

数え上げればきりがない。要するに稀に見る神戸詩壇の逸材であった。

震災の年の夏、私は伊勢田をさそって、兵教組の中国訪問旅行に同伴した。重慶からの数日にわたる河下りの船の旅、あの旅で、震災による心身の痛手もいくらかは慰められたと思う。伊勢田史郎と私との濃密な友情の証しであった。

⑤伊勢田史郎・元兵庫県現代詩協会会長の訃報と略歴（別枠に表示）
⑥〈詩作品〉「夢の中」橋本千秋
⑦〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽植村孝『エラー表示の男から』（私家版）▽谷部良一『四角い空と円い海と三角の日常』（土曜美術社）▽橋本千秋『夢の箱』（編集工房ノア）▽『安水稔和詩集成』（沖積舎）
⑧〈報告〉常任理事会の報告
⑨〈会員の発行書／会員の詩誌〉

★第39号（2016年7月1日発行、8頁）

①〈定期総会〉▽第20回定期総会が2017年5月9日神戸市中央区のラッセホールで行われた。第一部はたかとう匡子会長が体調不良のため時里二郎副会長が開会挨拶。第二部は永井ますみ氏が「万葉集と大伴家持」をテーマに講演した。

②〈講演記録〉総会第二部の講演の報告「万葉集と大伴家持―大伴家持さん私をそこへ連れて行って―」報告者・佐伯圭子

永井ますみ氏の講演は『万葉集と大友家持―大友家持さん私をそこへ連れてって―』と言う演題で展開され、琵琶奏者渡辺幸子氏による筑前琵琶演奏が華を添えて最後印象深いものになった。

永井ますみ氏は1948年生まれで、詩誌『リヴィエール』同人『現代詩神戸』編集担当。現在までに詩集『ヨシダさんの夜』『弥生の昔の物語』『短詩集』『愛のかたち』『永井ますみ詩集「新・日本現代詩文庫110」』などがあり、エッセイ集としては「弥生ノート」がある。詩集『愛のかたち』で第21回冨田砕花賞受賞。2000年ごろからビデオ撮影と編集に興味を持ち、最近は「詩朗読きやらばん」と称して朗読ビデオ撮影と編集のため日本全国を駆け巡る。2011年から詩の方向を弥生時代から万葉集の時代に転換して書いている。

まず、万葉集の成り立ちを永井氏なりに分析し〈仮説1、大友家持の個人歌集だった〉〈仮説2、藤原種継暗殺事件の時、家財と共に書物も没収された〉という仮説が立てられ展開された。それは永井氏得意のPCのエクセルを駆使して歌の作者を分析したり、円グラフで家持の歌、親類縁者の歌を割り出し、また色分けした年表などを作成、スクリーンに写し示された。その分析によれば、大友家持と明記されている歌が、447首、全体の11％を締めていることに注目し、またその歌には日時、場所、作歌時の気持ちが書かれていることもその根拠としている。そして、家持関連とされている歌が17％あること、縁者の内、特に叔母（父親大友旅人の腹違いの妹）の手ほどきを受けたことを挙げ、それらも記録されたものではないかと推測し、仮説の根拠としている。

万葉集が昨今、多くの人人によって研究され続けていることは周知のことだ。そこに一説を投じている永井氏が、近年万葉集を取り入れて詩を書いていることはよく知られていることである。詩の展開には永井氏の想像力と筆力が大きく働いていて、良い仕事になっていると思う。そして今回の演題に注目し、大友家持に関わるようになった動機を聞いてみたいと思っていたところ、丁度出席者の女性のひとりから同趣旨の質問があった。多分「大友家持のどこに惹かれたのか」というようなものだったと思うが、その質問に対して永井氏は「記録性を重んじたこと」と、もうひとつ「家持は、ひらがなに多く接することはあったが、漢字を学ぶ機会が少なく、恐らくコンプレックスがあったのでは。自分が詩を書くのもコンプレックス故」と動機の一端を吐露していることが、演者らしいことばとして筆者の心に残った。

もう一点注目したのは、大友家持が「藤原種継暗殺事件」の首謀者としての嫌疑をかけられていたが、（死後、一家持の死後20日後に事件は起きた―120年の後に無実が認められる）歌集が焚書されなかったのは、政治的なところが一つも無いものだったから、と永井氏の資料にある。変遷する政治の中で生き続けていく書物とは？

文芸に関わる者の多くが一度は考えることだろう。

最後に永井ますみ氏による大友家持らの歌の朗詠と琵琶の演奏があった。「朗読詩の中に取り込んだ万葉集」として十首ほどレジュメに紹介されている。朗詠と朗詠の間に挟まれた、歌の背景の朗誦と、渡辺幸子氏による筑前琵琶の演奏と奏者による澄んだ朗詠が印象深く華を添えた。がしかし、大友家持の歌〈海行かば　水漬く屍（かばね）　山行かば草生す屍（むす）　以下略〉の歌が入っていることについて、質問もあった。この歌は、先ず家持の歌であるという記憶より、むしろ戦時下で伝え聞いた記憶がある人が多く、出席者からそのことについての言及があり、永井氏からは「それは、利用されたのでしょうね」と、いう応答があった。この歌が家持の職業柄（兵部少輔他）生まれた歌であること、利用されやすい内容や言葉が使われていることに、いま少し丁寧な解説があったら良かったとも思う。

③〈文学紀行〉第4回文学紀行／報告者・井之上幸代（別枠に表示）
④〈詩作品〉「夢の中」橋本千秋
⑤〈イベント記録〉「『画家の詩、詩人の絵～絵は詩のごとく、詩は絵のごとく～』に参加して」にしもとめぐみ／2016年3月21日姫路市立美術館で行われた展覧会「画家の詩、詩人の絵」にあわせて行われたシンポジウムの報告。パネラーに鼓直（スペイン文学者）・時里二郎（詩人）・高瀬晴之（姫路美術館学芸員）・中居真麻（小説家・画家）・原田哲郎（美術家）京谷裕彰（詩人・美術評論家）。司会は大橋愛由等。
⑥〈評論〉「最晩年の竹中郁」季村敏夫（別枠にて表示）
⑦〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽紫野京子『切り岸まで』（砂子屋書房）▽和比古『擬人の構図』（ユニウス）▽佐藤勝太『名残の夢』（JIルサック社）▽野田かおり『宇宙（そら）の箱』（澪標）▽望月逸子『分かれ道』（コールサック社）▽森田美千代『寒風（かぜ）の中の合図（シグナル）』（澪標）▽安水稔和『声をあげよう　言葉を出そう』（神戸新聞総合出版センター）▽鈴木漠『連句茶話』（編集工房ノア）
⑧〈報告〉常任理事会の報告
⑨〈会員の発行書／会員の詩誌〉

⑦〈訃報・略歴〉伊勢田史郎（いせだしろう）（元兵庫県現代詩協会会長）

1955年詩誌「輪」を創刊。阪神・淡路大震災で自宅が全壊しながら、被災地からの文化復興をめざす「アートーエイド・神戸」の実行委員長を務めた。後進の育成に熱心で、兵庫県現代詩協会の会長も務めた。大阪・中之島の市中央公会堂を造った株仲買人・岩本栄之助の生涯を描いた『またで散りゆく』を朝日新聞に連載した。詩集に『低山あるき』『熊野詩集』など。7月20日、肝臓がんで死去。10月12日生田神社会館にて「伊勢田史郎さんお別れの会」が開かれ、120名あまりのゆかりの方がたが集った。本協会からもたかとう会長はじめ会員たちが出席した。〈第38号〉

③第４回文学紀行報告「飛鳥散策」報告者・井之上幸代

二〇一六年三月六日。生来、好奇心の固まりだけで中身は空洞だと思って生きている毎日で、飛鳥散策の文学紀行の出発の日を楽しみにしていました。

弥生とは名のみ朝夕は肌寒く心なしか固き蕾の膨らむ桜花の如き心境に、バスはお構いなく一路、ノンストップにて大阪の街を通り抜けて、南阪奈道路から葛城ジャンクションを経て最初の訪問地の「今井町」に到着。近鉄橿原駅の沿線に有り大和三山の近くらしい。

今井町は「重要伝統的建造物群保存地区」に平成五年匚一月に選定されて、天下を争う織田、豊臣、徳川の戦国時代に一向宗本願寺の坊主の「今井兵部卿豊寿」の寺を中心に城塞都市の形態を整えて、戦乱を逃れた由、かつて「大和の金は今井町に七分」と云われたほ、繁栄した町で現在も五百軒もの町家が連なり、町全体が江戸時代の姿を残しています。

三々五々に町中を散策しましたが、塵ひとつなく軒下には、可憐な花鉢が色とりどりに微笑みかけて昔ながらの生業を伝えながら、整然とした中に古式爽然と風情を醸し出して時を忘れるかのひとときで、忍者よろしく迷路の街並みを抜け出しました。

折りある毎に訪ねたくなる悠久の都は、「あすか・飛鳥・明日香」。遠い昔、見渡すかぎり稲穂が黄金に輝いて法隆寺の塔が厳かで、遥かに東の若草山がかずみ大仏さまやシカが懐かしいのです。

私たちの訪れた飛鳥寺は静かな場所の農村地帯でしたが、日本最初の寺で本尊は飛鳥大仏（釈迦如来像）です。

日本に仏教が伝来したのは飛鳥地方を都とした推古朝前後の時代の六世紀から七世紀半頃。古代の日本の歴史は「記紀」に「天孫降臨の神話」が語り継がれて、天皇を神として崇められた時代の側近の神教派と、仏教伝来を推す仏教の側近との争いは国政を二分する重大事件があった。

「クーデター」の勃発は曽我氏と物部氏の争いとなり、寺の焼き討ちゃら、寺を破壊したり、方や祟峻天皇の暗殺をしたりと静かな山村は、阿鼻叫喚の地獄であったことだろう。

飛鳥寺の創建時は塔を中心に東西と北に金堂を配し外側に回廊を、更に講堂を含む壮大な伽藍であった。飛鳥寺の西側の田の道の一角に、蘇我入鹿の首塚が有り無念の声が聞こえる。蘇我氏と物部氏の争いはどちらが善でどちらが悪なのだろう。

昼食は、日本料理「膳」にて、優雅なおもてなしの春の食材は、湯葉、筍、蕗、菜の花、天ぷら、釜飯、に宮人のほほえみ。

午後は万葉文化会館へ見学、神代の時代より古人は海の幸、山の幸を求め陸路、海路を駆け巡り、三韓征伐も運良く勝ったとか。朝鮮国の新羅・百済との交流を深めて「阿直岐」はシナの経典を読み、「王仁」は学者で日本の漢字の始まりとなる。結果、宗教・学問・芸術・文化・産業・工芸等の礎となった。

徒歩にてカメ型石造物、飛鳥板葺宮跡（壬申の乱）を見た後、天武天皇即位、律令制の確立などの説明を受ける。石舞台古墳（日本最大の石室を持つ）は蘇我馬子の墓の可能性ありとか、高松塚古墳（七世紀末～八世紀初）は貴人の墓との話を聞く。

ボランティアガイドの説明の最後に、高松塚古墳の壁画には極彩色で男女のすがたが描かれてあり、朱雀・青龍・白虎・玄武の四神図と、天文図などは日本の墓にはありません、とのこと。古代には近隣の国との交流などでたくさんの渡来人が来日していて、又は日本から隣国に渡った時代かおり、他国の歴史にも目をむけるべきでしょう。〈第39号〉

⑩〈評論〉「最晩年の竹中郁」季村敏夫

日本のモダニズム詩の一九二〇年代と三〇年代には、断絶がある。これは海野弘の卓見である。断絶の理由を竹中郁及びその周縁、或いは、彼らから遠い位置の詩人に即し問い直してみる。このことを促されたのは三度あった。最初は、『山上の蜘蛛―神戸モダニズムと海港都市ノート』（みずのわ出版）と『窓の微風―モダニズム詩断層』（同上）をたて続けに上梓したとき。

二度目は亜騎保や小林武雄らの『神戸詩人』五冊及び竹中郁らの第二次『羅針』十冊などの翻刻（都市モダユズム詩誌二十七巻『神戸のモダニズム』（ぬまに書房）をすすめていたとき。三度目は現在である。これまでの試み、そのモチーフや成果、今後の課題などを公開の場で議論したい、今般、関西学院大学の大橋毅彦氏らの「神戸近代文化研究会」から要請された。

声がかかれば、ひき受ける。これは、阪神大震災後の自分に命じた作法だったので即座に従った。だがたちまち、思考の難渋が始まった。これまで、モダニズムをタイトルに付加したり、拙論で何度も繰り出してきたが、そのことへの懐疑が襲ってきたからである。

竹中郁や神戸詩人事件に関する言説に触れたき、必ずといっていいくらい眼にするのがモダニズムである。そのとき、ぼくはいつも何がしかの違和、ずれのようなおもいを抱いてきた。何がしか、こう書くのはなぜか。ずれは、モダニズムという言葉を前に立ちすむからなのだが、この言葉の選択を自明にしない、自分にとってのモダニズムを明らかにさせる、いいかえれば、行使する言葉と言葉の行使を同時に疑う過程を徹底化させる、という自省が訪れた。

たとえば、お洒落、（イカラなどという形容はふるいにかけねばならない。そのとき、山本俊幸氏のこんな声が聞こえてくる。「ファッション性を抜きにしては、昭和初年から十年ごろまでのモダニズム詩を語ることは出来ない。もし、このファッション性を除いてこの時代の詩を語ろうすれば、それは片手落ちというものだろう」。［註］

竹中郁

確かに一九三〇年代のモダニズムの詩は、デパートや映画館が建ち並ぶ街路を闊歩するモダンガールやモボのゆらぎとともにあり、そこには、音楽、歌劇、映画、写真、絵画など他分野のはなやぎがもんどりうって押し寄せていた（先の『神戸のモダユズムロ』の関連年表では三宮周辺のダンスホールをピックアップ）。

詩の同人誌をみても同じである。君本昌久と安水稔和が作成した詩の年表の一九三一年（満洲事変勃発）から三三年（第一次『四季』創刊）、まさに創刊のラッシュである。しかもシュルレアリスムなどのレスプリーヌーボーの波を浴び、山本氏の指摘の通りである。

では竹中郁の二〇年代と三〇年代はどうか。パリに赴く前の二〇年代、ダダや構成主義をとり入れていた岡本唐貴や浅野孟府らとのパフォーマンス、三宮神社境内のカフェー・ガスでアポリネール六年忌の詩の展覧会開催。この尖端的な精神は、三〇年代には明らかに影をひそめてしまった。

その二〇年代のアヴァンギャルドの思潮だが、神戸にも芽生えていた。マヴォ関西支部の牧寿雄主催の萩原恭次郎の第一詩集『死刑宣告』の出版記念会が湊川神社の前のカフェーブラジルで開かれているからである。では、半裸状態で逆立ち、女装してダンスに興じる村山知義らのマヴォを神戸にひきこんだ詩人は誰か。詩人ではなく、神戸ロンダ組のアナキストだったのか。いまだ不明だが、アヴァンギャルドの地盤はまぎれもなく存在していたのである。

ところで最晩年の竹中は、化け物屋敷と呼ばれていた原田の西洋館で前衛劇を試みたこと、相当にいやがっていたのではないのか。それは室生犀星のように、晩年に自らの若書きを改作したことに繋がるのか。いや違う、敗戦をモダエズムの敗北と受けとめ直す、深く激しい拒絶だったとおもうがいかがであろう。

それにしても、足立巻一が描く（『評伝竹中郁』理論社）死を前にした竹中郁は難解である。それはこうである。「入院中、見舞いに伺うと、「自分には『動物磁気』と『ポルカ　マズルカ』との二冊があればいい。全詩集はいらない」ともらした。（中略）それを口に出した瞬間、竹中の表情が一変したのにわたしはあわててしまい、病院を飛び出したのである。わたしは帰りの自動車のなかで、竹中の泣き出しそうな顔がひどく気がかりになり、『全詩集』のことを持ち出しだのを悔いた」。泣き出しそうな表情、痛切である。二〇年代や三〇年代の作品をなぜ抹殺したかったのか。足立巻一の衝撃と悔い、ぼくにもずしり残され、あらだな思考を促される。

「註」
引用は山田俊幸「竹中郁論」（『都市モダニズムの奔流』翰林書房、所収）。帝塚山学院大学教授。なお同大学ホールで三月三十日「普段着の杉山平一先生」というタイトルで山田俊幸氏と杉山氏のご長女の木股初美氏のトークがあった。両氏に関しては『びーぐる』第十七号二〇一二年十月、特集・杉山平一参照。

〈第39号〉

★第40号（2016年12月1日発行、8頁）

①〈報告〉10月2日ラッセホール・リリー（神戸市中央区）の間において「2016年・詩のフェスタひょうご」のイベントが行われた。今年度は兵庫県現代詩協会設立20周年にあたり、詩のフェスタひょうごのイベントの過去の企画などの推移にも思いをはせられた。第一部は詩人・高橋睦郎氏の講演。が始まった。テーマは「女性詩の力に導かれて」。「女性詩」がキーワードの講演実体験を踏まえた貴重な内容で、現代詩、短歌、俳句、古典文学に通じた高橋氏の創作の一端に触れられた。このことは呪文、巫女の唱える言葉などの広い範囲から、女性性が通低している秘密の在り方のなかに詩の本質を見て、「自己主授ではなく、自己開放です」と話された高橋氏を支える強い詩意識ではないか、と思う。第二部の自作詩朗読会は、大西隆志常任理事の司会で開始。今回の応募者は十四名であった。

②〈講演記録〉「高橋睦郎さんの講演について」―『女性詩の力に導かれて』報告者・梅村光明

「高橋睦郎です。今日の講演のタイトル、実はこれはゲーテの言葉のパクリでして、『ファウスト』の中に出てくるものです。「永遠に女性なるもの我らを導く」、それはそのまま僕の実感です。

僕はまもなく七九歳になり、振り返ればその半生の中心は「詩」でした。その「詩」が中心の人生に僕を導いてくれたのは、男性ではなく女性だったというふうに実感します。

中学に入学して、本当の意味での詩との出会いがありました。同級生に誘われて文芸部に入り、蔵書の一冊であった呉茂一訳『ギリシア・ラテン抒情詩選』を読み、何か分からないが打ち震える感動を覚えた。それが詩との出会いだと思います。

文芸部の柳田千鶴先生の指導で詩作が習慣になり、僕は書くことを覚えてしまいもう抜けられなくなった。これも女性の先生ですね。これが、後に女性詩人たちに導かれる底流になったのだと思います。

本題の女性詩に入りますと、僕が女性詩人で最初に大きな影響を受けたのは、片瀬博子という人でした。一九二八年に生まれて二〇〇八年に亡くなっています。読み返すべき重要な詩人だと僕は思います。

片瀬さんとの出会いは一九五九年でした。福岡学芸大学の四年生の時に結核に罷り、死を考えるが生活保護があることを知って、県内の結核療養所に入所します。入所直前に出した第一詩集『ミノあたしの雄牛』により、推薦されて同人誌「地球」に同人費免除で加わりました。

片瀬さんも同時期に「地球」同人になり、知り合ってから見舞いに来てくれるようになりました。詩の話をよくしました。治ってからは彼女の家を僕が訪れ、付き合いは続きました。片瀬さんの詩は

⑤〈読書会〉第10回読書会「高橋睦郎さんの詩について―チューター時里二郎―」　報告者・田中信爾

（1）はじめに

時里氏と知り合いであった望月通陽氏、この方は染色家で、今では、ブロンド、鉄などに作品を広げておられるが、この方の招きで大分へ行く機会があった。ここへ高橋氏が講演に来られるということがあり、この三人の繋がりの中で、今秋の高橋氏の神戸での講演の快諾を得た。高橋氏の基本的な人生観は、恥しい者、醜い者であり、いわば（おでき）のような者である。しかし裏を返せば一種特別な存在ともいえるのであろう。自己を越えたセンサーのような存在ともいえる。

（2）六〇年代の詩人たち

六〇年代の代表的な詩人といえば、吉増剛造、岡田隆彦、天沢退二郎、渡辺武信、鈴木志郎康、北川透などの詩人達であった。これらの詩人達の特徴は、特異なイメージ、スピード感、完成の拒否、モラルの排除などをあげることができる。しかし、高橋氏の詩的出発は非常に古典的な、言葉のロジックに沿うものであり、そういう意味では異端的なものであったといえるだろう。彼の詩学、神（ポエジー）しるしなき神（ポエム）に例えられ、ポエジーがポエットを選ぶという図式になる。ポエジーを受け止めポエムを生み出す詩人というカトリック神学の世界といえる。

（3）大スランプの時代

一九七一年『頒一はめうた』から、一九八二年『王国の構造』（藤村記念歴程賞）までの諸作は、作者によれば大スランプの時代であった。それは書いていても手応えを感じない時代であった。しかし、時里氏によれば皮肉にもこれらの諸作は素晴らしく『王国の構造』は、バイブルといえる詩集である。この時期の作品は言葉による大きな聖堂であり、ここに詩人の（私）は入って来ない。これが大きな特質といえるだろう。

（4）詩人を「着る」

一九八二年『鍵束』によりスランプの時期を脱することができた。それは交通事故による入院を契機にそれを自覚したという。それは他者へ捧げる詩であったり、哀悼の詩であったりする。例えば「小夜子」という哀悼詩では、「顔も体もない」詩人が、他者（死者を含む）を着るという形で、他者と同時に「私」をも表現しているという形になっている。「私」は生身の私ではない。それは古典芸能である能に近い。演者が、平家の霊を登場させるのはワキ（僧侶）である。この「私」は能のワキに近い存在と考えてもよいのではないだろうか。

（5）短歌、俳句など

句集として『稽古飲食』、歌集として『持たな週末』がある。後者は必ずしも面白いとはいえないかも知れないが、非常に形而上的なものがある。最後に、高橋氏の「私性」の転換についていえば、時里氏が「現代詩手帖」（二〇一五年）に書かれているしてやまない詩人の『私性』であり、それも詩にうつりこむ影のように、作品空間にとどまることはない。修辞の埴蝿は常にからつぼである」。

それは「ちょうど『小夜子』において、サヨコが通り過ぎていったように」、ということなのであろう。

〈第40号〉

⑥〈未収録詩の発掘〉『竹中郁詩集成』未収録作品

季村敏夫

戦時下の東京から刊行された同人誌『航海表』三号（昭和三年九月発行、編輯兼發行者中村喬、發行所聖保羅詩學協會、市外澁谷町長谷戸廿七番地）に竹中郁の小品が掲載されている。

航海の手帳（印象のきれぎれ）

トミタサンニ　竹中郁

・神戸解績

ロングサインが牛のやうに鳴いた。　僕は花束とサアペンタインとに埋まって、まるで楽しい牧場にゐるやうな気がする。　母親の涙が太陽さまに向つて、遠い丙眼鏡のやうに光ってゐた。

・門司

何て美しい石炭だらう。　石炭は勞働者の手から手へ渡って、いよいよ火夫が投げ込む時には、かつと眼をむく寶石だ。

・八幡

二等客車に乗ってきた貴婦人の、そつと覗いた白足袋が、家なし猫のやうに汚れてゐた。皮肉にも。

・上海

使ひ残した小洋貨三枚を、怪しい支那人と両替するより、ウエストミンスタア二箱と一束の三色菫とを買った方が、はるかに気持はせいせいする。

・香港

ここは要塞地帯です。うっかり書いて罰金とられちやつまらない。

・新嘉坡

水に沈んでゆく銀貨を追っかけて、黒ん坊は足の裏をみせる。　ああ、そこだけが、ペンキを塗つたやうに白い。　僕はいくたび、銀貨を海に投げただろう。

・ジョホール王国

王妃の墓石にばらまかれた蘭の花に匂ひのたかさ、そのうへで背中をくねらせてゐた一匹の蜥蜴の美しさ。熱帯園の午さがり。

・コロンボ

印度人の寶石商人、偽の硝子の玉でさへ、彼等の肌の傍では美しい。夫人、だまされてでも買ひませう。

・亞典

不毛だ。　蚤もかくれるところがない。それなのに黒死病が流行ってゐて、僕ら船客たちは上陸禁止をくらつた。

トミタとは富田彰で、第一次『羅針』時に竹中郁の周辺にいた詩人である。『羅針』十二号（大正十五年）の広告欄に富田彰の近刊詩集『窓の微風』とあるが、一冊の詩集を出すことなく京都で自殺している。同志社大学入学、天野隆一主宰の『青樹』（京都詩人協會）に三号（大正十四年）から参加、やがて関西学院英文科へ転学、さらに立教大学へ、『航海表』を主宰した中村喬とはそのときに知りあったとおもわれる。

※拙著『窓の微風―モダニズム詩断層』（みずのわ出版）の「『羅針』の富田彰のこと」参照。

〈第40号〉

僕にとっては全く新しい世界で、これを一口で言うと命の頂点においてエロスとタナトスが結び付いた、性愛と死が結び付いたそういう詩でしたね。

結核罷病者は教職に就けないことを知り、卒業式の翌日上京するんです。そして「地球」の集まりで同郷の詩人安西均に出会います。ある時安西の会社、日本デザインセンターに行ったら、今日からバイトしてみますか、と言われバイトで入りました。

そこに入って二年経って詩集を出しましたが、ある日、谷川俊太郎とばったり会い、実は詩集を出そうと思っており、もし日を通して頂いてお気に召したら、何か書いて下さいますかと言ったらば、「じゃあ送って下さい」ということになり、政文を書いて下さり詩集『替薇の木　にせの恋人たち』が出た。

その詩集に対して非常に好意的な批評をしてくれたのが、多田智満子さんだったんです。その後、白石かずこに紹介されて、彼女とお付き合いするようになりました。

僕の中には元々、キリスト教的な世界への関心と同じぐらい、古代ギリシャ的な世界への関心がありました。キリスト教世界への関心において、僕を導いてくれたのが片瀬博子なら、古代ギリシャ的世界へ導いてくれたのは、僕を弟的存在として一歩先んじて共に歩んでくれた多田智満子さんでした。

多田さんと僕の歩みにはもう一人同行者が居ました。鷲巣繁男という存在でした。僕たちは三人が共に敬愛する呉茂一先生を顧問格に「饗宴」という名の同人雑誌を出しました。その事で多田さんと僕は一層親しくなりました。

多田さんが病気になって、その前に僕が詩集を二冊編集したのは、多田さんへの長年の付き合いに対する細やかな恩返しです。多田さんが亡くなったのが二〇〇三年一月で、片瀬さんは一九九三年に脳出血で倒れています。クリスチャンホームに育った人で、キリスト教の宣教活動をやり、教会堂建設に非常に尽力して、その献堂式に出た、その後に倒れたんです。その後の、リハビリ期間中に書いた詩が本当に素晴らしいんです。倒れた後の詩が。そして詩集を纏めたいと言うので、『片瀬博子詩集』を僕は編集しました。片瀬博子と多田智満子という優れた女性詩人に出会い、導かれることが無かったら、自分の詩は随分貧しいものになっていたという事だけは言えます。

結局僕は女性詩人、あるいは女性歌人・俳人から色んな影響を受けています。その女性詩人とは一体どういう存在なのかという事ですが、その前に詩はいかにして発生したのかを説明します。詩には宗教の中から詩が発生、あるいは男女の恋から発生した、あるいは労働歌とか、そういう中から発生したという、三つの大きな説があります。

僕は日本人である所為か、恋愛発生説に傾きます。それは宗教含みの恋愛発生説です。恐らく歌の起こりは、男神から妻である巫女へ呼びかけたので、男性から歌が始まったと思いますが、神には本来音声がありませんから、それは巫女の口を借りて歌い出すと。つまり、巫女という女性こそが最初のうたびと歌人であり、詩人だったのが男性に奪われた、それが詩の歴史だと言っていいんじゃないでしょうか。

事実の上でも、日本の最初の大歌人は巫女的要素の強い、額田王ですね。その後輩として宮廷歌人の柿本人麻呂がいます。宮廷歌人は天皇及び皇族など男性的なものに対して、女性的スタンスに自分を置いて歌う、そういう存在です。

人麻呂に続く山部赤人も大伴家持も、のちの紀貫之、西行、定家、能の世阿弥、俳諧の芭蕉も大詩人は悉く女性的要素を色濃く持っています。これは近代詩の島崎藤村、蒲原有明、萩原朔太郎、宮沢賢治などにも言えることではないかと僕は思います。

現在は、自由詩も定型詩も元気がいいのは女性です。女性詩の時代だと僕ははっきり言えると思う。これは詩本来、詩人本来のあり様に立ち返ったんだと思います。男性詩人たる者すべからく、虚心に女性詩人に導かれるべきではないかということを結論にして、

■③〈読書会〉第9回読書会「草野心平の詩について」2016年2月20日　私学会館／チューター高谷和幸　報告者・大西隆志

五か月の余裕があったのに、草野心平を調べてみると、思ったより大変だったと笑いを取ったあと、「草野心平の魅力」ということで、高谷氏がどう語るか、に興味をもった。難解な詩を書いているといわれる高谷氏ではあるが、美術へのこだわりと洞察力は、詩の構成に大きな意味をもっている。草野心平は色彩の豊かな詩人でもあり、美術家との関係など高谷氏ともある意味で共通項があり、親しみのある詩人だとは思った。「蛙の詩人」と呼ばれ、教科書にも載っている国民的な詩人のイメージもあるが、評価のむつかしい詩人でもあるとの中野重治の批評から、「評価のむつかしさは草野詩の遠心性、衝動性を挙げながらその複雑な性質に起因する」を取り上げ、草野の大陸への渡航の話などが語られた。高谷氏にとって、詩人としての玲持に満ちた草野のエピソードは強く興味を惹くものだったようだ。

大正十二年徴兵検査のため広州から帰国、長崎の本屋で「詩聖」に自分の詩が入選、その誌に偶然に村山椀多の詩が掲載されていて大きな感銘を受け、平市の柴田書店で新刊の『椀多の歌へる』と出会う。その後五〇年たって初めて草野は村山椀多の本を上梓した。草野にとって椀多理解は五十年間の草野自身の「技術論（詩論）」でもあったと言える。

かつての鼓術論も詩がエスプリをもった物体と考えれば、そこには主義や観念を超えて存在するある一つの「物体」であると言えるだろう。詩情は所謂意味でもなく、そこに目に見えて存在する美（もの）であり、その存在に対して製作中の僅かな関与があるばかりである、と。出席者24名。

〈第41号〉

■④〈読書会〉第11回読書会「安西冬衛」を読む―蝶は本当に海峡を渡ったのか／二〇一六年十一月二十六日　私学会館　チューター　北野和博　報告者・由良佐知子

秋日和にかかわらず集う者が多いのは「安西冬衛」という謎の詩人に惹かれてのことだろう。出席者34名。

―てふてふが一匹琵担海峡を渡っていった。

「春」の詩人という知識のみで参加したが、当日、北野氏が用意された24頁にわたる資料に驚いた。詩集はすべて廃版になっていることからの配慮である。まず年譜から辿る。明治三十一年奈良に生れる。十三歳の大阪府立堺中学校時代はボート、水泳の選手として活躍。父から漢籍を与えられ愛読。十八歳より俳句を「ホトトギス」に投稿。二十一歳、父のいる大連に移る。後の詩作に大きな影響を与える。二十三歳、満鉄に入社。後膝関節疾患で右足切断手術。二十五歳頃より詩作をはじめ翌年、詩誌「亜」を滝口武士と創刊。三十一歳、第一詩集『軍艦莱荊』刊行。三十六歳で帰国後も小説、随筆など旺盛な文学活動。六十七歳で永眠。

作品の読み解きに移る。「軍艦莱荊」の妹は主人公にとつての理想の女性像として読める。「誕生日」「再び誕生日」の（誕生日）は独立のメタファー。「春」の二篇はセットで見開きに掲げられた。続く短詩数編にも「准南子（えなんじ）」などの博識が散りばめてあったり、性的メタファーが隠されていたりと、表と裏の読みができる。

「土耳古」

新月は煙んだ。橋によじ登った男は郵便切手に秘蔵（しま）はれた。湾はうすらと暮霞の底に象摸されてゐた。

トルコの国旗を連想するとみごとな写生詩という。

イメージの詩人である。

散文詩「菊」「地球儀」では架空の妹への願望をはばからず書きぬける勇気。（お見様、お見様、曇った日でも夜になれば一緒）という言葉は余韻を残す。

一九四七年詩集『琵担海峡と蝶』を出す。その三年前の『大学の留守』にも同じタイトルの作品がある。これほどまで原点ともいえる「春」を強調するのは、より深く読み取ってほしいということか。「すると一匹の蝶がきて静に銃口を覆うた。」（琵鞋海峡と蝶）「すると、妹の優しい骨盤―石灰質の蝶が苦（さ）えてくるのであった」（堕ちた蝶）

蝶とは何の代名詞なのか。性的高まりを知的に表しているとも。北野氏はシネマに詳しい。蝶の詩はモンタージュの手法を取り入れていると、最後に映像を披露する。シュールリアリズム第一号の映画「アングルシアの犬」（サルバドール・ダリ作、主演）と「戦艦ポチョムキン」（1915年）の一部分。オデッサの階段での人民の流れと、人物大写しのモンタージュは衝撃である。諸先輩から評判を聞いていたので、よい機会であった。安西冬衛は、当時流行していたシュールリアリズムの情報を得ていたのではないか。

これまで、「てふてふ」の柔らかく、いたいけなものが「韃靼海峡」という荒波を渡る、孤独のイメージが強烈だった。たとえ春、壁に貼られた地図の上に、蝶が留まったのを目にしたとしても、それを詩に昇華させるには、工夫と衝動があった。「間宮」から「韃靼」に置き換えをひらめいたのは偶然ではなく、日頃の詩的言語、文字、音に対する冬衛の鋭い感性からに違いない。今回の読書会で、心底にある動機の一端にまで触れ、ますます謎の詩人になった。

〈第41号〉

この講演を終ります」

③〈即興詩連作〉「テーマ=拒みの海」瀬戸内国際美術祭に参加した兵庫県現代詩協会の会員たち（「月刊めらんじゅ」誌友）が元ハンセン病患者が暮らす香川県の大島を訪れた時に作られた即興詩の紹介／大西隆志「大島幻視行」・月村香「ふるえ」・高谷和幸「大島」・大橋愛由等「とどかない」・にしもとめぐみ「青松園」

④〈読書会〉第8回読書会について／テーマ=「三好達治の詩」／チューター・北岡武司／報告者・山本真弓

⑤〈読書会〉第10回読書会について／高橋睦郎さんの詩について―チューター時里二郎―報告者・田中信爾（別枠に表示）

⑪〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽『田中荘介自選詩集』（濡標）▽安水稔和『隣の隣は隣―神戸わが街』（編集工房ノア）▽神尾和寿『アオキ』（編集工房ノア）▽伊勢田史郎『またで散りゆく―岩本栄之助と中央公会堂』（編集工房ノア）▽たなかとしひろ『イエスをめぐる人間像』（関西学院大学出版会）

⑩〈報告〉常任理事会の報告

⑪〈会員の発行書／会員の詩誌〉

★第41号（2017年7月1日発行、8頁）

①〈総会〉第21回兵庫県現代詩協会の総会が5月7日ラッセホール・バイオレットの間（神戸市中央区）で行われた。定期総会報告第28回理事会が開れた。司会は玉井洋子常任理事。たかとう匡子会長が開会の挨拶。第二部は、会員の和比古（新常任理事）が「私の科学と詩の歩み」をテーマに講演。

②〈新役員〉▽会長=たかとう匡子▽副会長=時里二郎▽事務局長=神田さよ▽会計=野口幸雄▽常任理事=大西隆志・大橋愛由等・尾崎美紀・和比古・北野和博・神尾和寿・玉川佑香・丸田礼子▽理事=玉井洋子・渡辺信雄▽監事=梅村光明・高谷和幸

③〈講演記録〉第二部の講演について―『私の科学と詩の歩み』和比古（講演者自ら）による要旨

文学や美術などの芸術と科学は両立するものであろうか、また共通点はあるのか、私なりの見解について話したい。科学の世界の化学者である私が如何に詩と絵に魅せられてきたかについても述べたい。地震学者で随筆家である島村英紀氏によれば、科学者と詩人には共通点があるという。共に世間知らずの「孤独な戦士」であると指摘されている。しかし、彼によれば、この点が創造のための必要条件である。同じ次元とは言わないまでも、よく似た一面をもっている。さらに、化学者であるHoffmann教授は、有機化合物の合成は発見と創造に基づいたアートであると見なしている。Eliott氏は詩論を展開するとき、化学における触媒機能との共通点に言及している。

大学に入学後、化学以外でも創造的なこと、特に美への挑戦がしてみたくなった。カンディンスキー、クレー、ムンク達の絵を見るとともに、萩原朔太郎、中原中也、立原道造等の詩を読んだものである。インスピレーションとして感じる美を表現したい衝動に駆られ、詩と絵の世界に入っていった。刹那的心象風景を書きとめることにより、自らの感性を高めようとした。絵も独学であるが、描き始めた。

さて、化学は幅広い研究分野からなっている。燃料電池、太陽電池のように将来性のあるエネルギー源、炭素繊維に代表される新素材、医薬や人工臓器のような再生医療でも必須の学問であるとともに、環境保全の観点からも重要である。また、情報テクノロジーでも最先端の技術を可能にしている。これまで日本の化学者は大きな貢献をし、数名がノーベル化学賞を受賞している。

私の研究の基礎になる原理は亀子移動の制御に基づいており、機能も美しいことが必要である。そのためには生体系を規範とする反応を開発、システムを設計、ナノ空間を構築しなければならない。まず、カップリング反応に関し、炭素―リン結合形成のための新触媒反応（平尾反応）を開発した。美しい反応様式と高い評価を受けている。さらに、未開拓のカップリング反応として、求核種同士や求電子種同士の選択的な交差カップリングをパナジウム化合物のレドックス機能を巧みに活用することで達成した。

電子が流れる導電性高分子と金属をハイブリッド化し、従来にない機能性触媒や電子材料を可能にした。一方、平面パイ共役系であるベンゼンは発がん性であるが、それが無限大に平面で拡がったのがノーベル賞のテーマとなったグラフェンである。他方、非平面の化合物の代表としてフラーレンが挙げられる。カーボンナノチューブも知られている。第3のキーマテリアルズとしてフラーレンの部分骨格でボウル状化合物のスマネンやコラニエレンがある。スマネンは未知物質であったが、2003年に我々の研究室が世界で初めて、しかもエレガントなプロセスで合成することに成功した（サイエンス誌掲載）。美しい構造をしているので、有機化学美術館で紹介されている。ボウル反転することも明らかにした。結晶は半導体であり、金属とのハイブリッド化では非平面パイ―金属共役系が構築された。

このようなシステム形成に加えて、生体分子と金属をハイブリッド化した生物有機金属化合物を設計合成し、生体系のような空間を構築することに成功した。新分野であるこの生物有機金属化学の研究において、国際的にリーダーシップをとった。

これまで化学に夢をもって新しい研究領域に挑戦してきた。化学の世界でも美的、詩的センスが必須であったと考えられる。脳をいろいろな分野で可能な限り機能させることにより、よりよいアイデアが生まれてきたと思われる。美を追求して、新たな研究を展開した結実である。このように構造や機能が美しい分子システムを化学の世界で創製しながら、研究生活を送ってきた。以上の成果を総括した本と、諸外国の友人の結果を含め系統的にまとめた本にそれぞれ集大成した。

自然の中における小さな人間の活動の評価は「視点」によって様々であるが、その人が力の及ぶ限り「精進」して得られる「達成感」に価値があるのではないかと思われる。

詩と絵に関しては、パステル画とコラボレーションした第一詩集「構図のあるバラード」を出版した。さらに、「風の構図」、「道化の構図」、「擬人の構図」も出版した。これらの詩集では各詩に絵を付している。ジャズやクラシック音楽が響く部屋で、化学専門書と詩集が同じ本棚に並んでいるのに違和感はない。

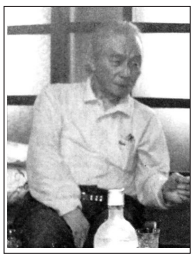
☆講師略歴

平尾俊一（本名：ひらおとしかず）、京都大学大学院博士課程修了、工学博士、大阪大学工学部助手・助教授・教授を経て現在名誉教授・特任教授、大阪大学理工学図書館長、日本化学会副会長、国際生物有機金属化学賞、国際バナディス賞

③〈読書会〉第9回読書会「草野心平の詩について」2016年2月20日私学会館／チューター高谷和幸／報告者・大西隆志（別枠

⑨〈追悼・直原弘道〉一乗寺鉄男さんに出会ってから

三宅武



直原弘道さん（写真）は、一九三〇年生れだから、私より四年先輩にあたる。一九四五年八月十五日、私は十一歳、直原さんは十五歳。この時代の小学五年生と、中学三年生の差は、実体験の認識に、相当な開きがある。後期高齢者になっても、この差は変わらず、いわば兄貴世代とも言える。たとえ一年違いでも同じことであると思ってきた。

一九五七～八年、私は『木賃宿』同人であった。元町商店街を、なかけんじ氏と歩いていて、出会った。「一条寺鉄男さん」と紹介された。『輪』創刊後、間もないころであろうか。

メーデー、六〇年安保、後に第三紀層で一緒になる安部繁男、北見哲也たちに出会った湊川公園。私はあまりにも小規模の団体で参加していたが、気持ちだけは蓬旗を持っているつもりだった。

会場で見た共産党の五人乗りピックアップは、ブルーと白。前部バンパーに立てられた赤い小旗は、党名だけが小さく染め抜かれ、マスコミ取材班に似てスマートに見えた。

運転していたのが、一条寺鉄男さんだった。クルマのデザインをしたのは彼だったかもしれぬ。

一乗寺さんの家は、赤松徳治さん宅のそばから坂を上がったところにあった。このクルマが駐車していたのを、ときおり見た。

ここに最期までお住まいだったらしい。

一乗寺さんは、直原さんとなり、親しい人々は「じきさん」と呼びかけていた。私は、長らく直原さんと会っていない。『現代詩神戸』の作品と頂く詩集だけの間柄となった。

二〇〇六年六月、兵庫県現代詩協会の会則第５条第２項が、「この会に入会後２年を経過した会員は、満８０歳に達した次期の会計年度から会費を免除される。（名誉会員）」と改定された。

同じく第１６条②も改定され、「……名誉会員は、会を運営するために選出される理事会への被選挙権を除いて、会員としてのすべての権利が保障される。」となった。この規約改定のとき、直原弘道さんが提案要旨の説明をされた。

やがて、わが兵庫現代詩協会員の年齢も高くなり、二十二名の名誉会員制度は、二〇二年の規約改定で中止された。

私に「おい三宅」と呼び捨てにする友人は、たった一人しか残っていない。直原さんは、「三宅クン」だったが、こういう先輩は一人も……。

〈第42号〉

に表示）

④〈読書会〉第11回読書会「安西冬衛」を読む―蝶は本当に海峡を渡ったのか／２０１６年11月26日　私学会館　チューター北野和博　報告者・由良佐知子（別枠に表示）

⑤〈イベント〉◇第６回ポエム＆アートコレクションが２０１７年１月14日～24日まで神戸文学館にて開催された。会期中、特別イベントとしてたかとう匡子会長による講演「兵庫・神戸を生きた詩人を語る―君本昌久について」があった。

⑥〈講演記録〉たかとう匡子会長による講演「兵庫・神戸を生きた詩人を語る―君本昌久について―市民連動の先駆者でもあった戦後派詩人」

〈人は魂におぼれることがある〉報告者・玉井洋子

君本さんのモダニズム詩についてはこれまでにも書き、語ってきたが今回は「市民運動の先駆者でもあった戦後派詩人」としての側面を見てみたい。君本さんとはじめて出会ったのが１９６０年。彼は第二詩集『手』を出版。安保反対デモで荒れたその年の暮れに伊勢田史郎、中村隆、安水稔和民らと雑誌『蜘蛛』を出版。それに先立ち神戸新聞会館で詩の教室もはじめられていて、そこに安水さんや松尾茂夫さんもいた。当時私は二十歳。その頃君本さんは「手」を安水さんは「鳥」ばかり書いておられた。

資料の年譜（古書籍商間島保夫さん作成）によれば１９４８（昭和23）に市民同友会が発足しています。君本さんはこの文化団体を拠点に市民の学校、神戸空襲を記録する会、一人だけの蜘蛛出版をたちあげるなど幅広い活動を続けることになります。69歳で亡くなったのが残念だが、蜘蛛出版で１１０人以上の詩集を手がけ、永田助太郎　棚夏針手　宮野尾文平　春山行夫ノートなどを残されたのは詩史的にも貴重な仕事だった。

大阪生まれ。立命館大学哲学科卒。年譜ではそこまでしか分からないが、今回調べてみると大阪西区生まれ、西岡高校（現在名）出身。立命館大学の雑誌『石原莞爾研究』（１９５０年（昭和25）８月号）によると、日蓮宗に憧れていたこと、在日朝鮮人であることなど自身の記述がみられる。

※市民同友会たちあげまでのこの20年を検証すれば、彼が何に傷つき悩んできたかが明らかになるのではないかと思う。

彼は政治や時代に敏感な人で１９６５年に『思想の科学』にいちはやく「神戸詩人事件の受難」を寄稿。この時期にこれを書くのは大変なことであったと思う。

第二詩集『手』から。

手は事件だ
血を流し
追い詰められてやってくる
あの酷い事件だ
やさしく犯し
容赦なく殺（ばら）す
あれ……

安保闘争の時代を背景におくと見えてくるものがある。

54歳『デッサンまで』から「ゆめのあとさき」を。

いつまでゆめみれば
もえつきるのか
こいでもこいでも
たどりつけない
たどりついたとおもったところから
おちてゆく
ならくのように
そらからうみから
ことばから
さけびごえがきこえてくる（後略）

この詩には半世紀にわたる人生の感慨が吐露されているようだ。交響曲の第九になぞらえた九冊目の詩集「ぼくの第九」のタイトルはさすが。しかし、詩はよりリアリズムで書かれるようになっている。

いつしか
つむじ風　吹き荒み
コトバの弦　断ち切られ
歌は　虚空へ舞いあがった……（幻滅）

詩、以外にも「いろまち燃えた福原ノート」（三省堂）や評論、編著など多数もつ君本さんの〝しごと〟をまとまった形でみられないままになっているのが気がかりでならない。そういう意味でも、モダニズムからリアリズムへとふり幅の広い君本さんを今は「未定の詩人」と位置づけておきたい。

たかとうさんは約一時間の講話をそう結ばれた。

私（筆者）は市民の学校を受講し、市民同友会の事務局につとめていたことがあるのでたかとうさんのお話をとりわけ懐かしく聞いた。私が勤務しはじめた１９８１年頃には、安保もべ平連も、その他多数あった市民運動は終息し、君本さんが事務局長をつとめる市民同友会の事業としての市民の学校と神戸空襲を記録する会の活動が続いているくらいで、組織もそれを束ねる君本さんも疲弊していた。

※市民同友会は長田のむろうち文化協会を足掛かりに１９４８年（昭和23）年に社団法人の認可をうけて設立された文化団体で、君本さんは１９５３年（昭和28）に事務局職員として入局していて設立にはかかわっていない。

事務所維持のために移転をかさねた初期のその一つが神戸新聞会館で、20歳のたかとうさんが訪れた詩の教室のあった場所である。阪神・淡路大震災で被災し、新聞会館は新しく「ミント神戸」

⑧〈報告〉兵庫県現代詩協会創立20周年記念会＆『ひょうご現代詩集２０１６』出版記念会―詩で架けよう未来に向かって―　報告者・神田さよ

２０１７年３月18日元町風月堂ホールにて、兵庫県現代詩協会創立20周年記念会＆『ひょうご現代詩集２０１６』出版記念会が行われた。

震災から22年の月日が流れたが、震災直後、故伊勢田史郎氏が立ち上げた「アート・エイド神戸」でアンソロジー『震災詩集』を３冊出版した後に、これがきっかけとなり協会が発足した。本年は設立から20年目を迎える。

まず、たかとう匡子会長から開会の辞が述べられた。協会として様々な取り組みをしているが、読書会など詩で深く繋がる団体となっている。会員の高齢化により会員数は減少しているが、これから未来に向けて新しい会員と共に、充実した団体として歩んでいきたいと、未来へ向けてのエネルギッシュなスピーチをされた。次に来賓として御臨席された、関西詩人協会会長有馬敲氏、岡山県詩人協会会長重光はるみ氏から心温まるご祝辞をいただいた。イベントに入り、会員の永井ますみ氏がＤＶＤに纏めてくださった協会の20年の歩みを、映写した。資料あつめに労力がかかったが、懐かしいことや楽しかったことが場面ごとに思い出され、胸を熱くした。初代会長安水稔和氏もお元気に登場されメッセージを託された。

会員の主宰する同人誌の紹介には９詩誌が参加して、それぞれの詩誌の特徴などを工夫を凝らして発表した。参加詩誌は、「ア・テンポ」「OCT」「風の音」「現代詩神戸」「鵠舘」「多鳥海」「プラタナス」「Mélange」「Messier」。

一詩誌の持ち時間が少なかったこともあり、予定時間を超えてしまって申し訳ないことだった。その後、昼食となり、今回は座席をくじ引きで決めたこともあり、初めての方と会話を交わすこともでき、会場は大変賑わった。「pepal blanco」のラテン音楽の演奏も大いに会場の雰囲気を盛り上げ、代表の外薗美穂さんのバイオリンも熱演だった。

『ひょうご現代詩集２０１６』の編集責任者大橋愛由等氏より出版の経過などが話された後、このアンソロジーに参加した全ての作品から１部を抜き出し、「１３５の言葉」として朗読した。「神戸ドラマ倶楽部」の山川清文氏、「劇団ここから」の橘美恵子氏が朗読をした。一瞬の風が吹き抜けるような短い数行を紹介し、詩人の感受性の片鱗を少しでも感じられ、切り取りされた詩の言葉ですが、声に出してみることで、詩の森を散策するように受け取っていただけたと思います。

お開きの時間となり、時里二郎副会長が、終りの挨拶をした。これからも、協会のイベントや勉強会になるべく参加していきましょうと、今後の意気込みを話された。関西詩人協会から有馬会長の他、大倉元事務局長、岸本嘉名男氏、槻次郎氏、また、岡山県詩人協会から重光会長、くにさだきみ氏が遠方から来て下さり、近隣の詩の団体との詩を通じての輪が広がるよい機会になったと思う。会員も多数参加して、会員同士の繋がりもでき有意義な会となった。なお、今回欠席の安水稔和顧問よりご著書「春よめぐれ」が参加者全員に謹呈された。参加者64名。（会員外６名含む）

〈第41号〉

に建てかわり、現在そこでたかとうさんの「詩の講座」が開かれているのは感慨深いものがある。

君本さんの詩に少なからぬ影をおとしている組織のあがき。にもかかわらず彼は、発足当初の設立メンバーの一人、ハタセンこと畑専一郎氏が提唱されたフェビアンソサイエティの理想を愚直なまでに守りぬこうとしていた。1993年、その45年の歴史を閉じるにあたって刊行された市民同友会創立45周年記念誌『夢の跡めくれば』に記されていた君本さんの深い思い。

―そうだ人は魂におぼれることがある―

受講料が免除されるという君本さんの誘いにのって、軽い気持ちで事務局に入ったのだったが、通算18年。とうとう市民同友会と28年続いた市民の学校のフィナーレを君本さんと共に見てしまった。

⑦〈連詩〉「連詩〈イカロス〉の巻」詩誌「ア・テンポ」の同人諸氏による連詩／梅村光明→由良佐知子→玉井洋子→井之上幸代→山口洋子→内田正美→丸田礼子→山本真弓→牧田榮子→梅村光明→由良佐知子→玉井洋子

⑧〈報告〉兵庫県現代詩協会創立二十周年記念会&『ひょうご現代詩集２０１６』出版記念会―詩で架けよう未来に向かって― 報告者・神田さよ（別枠に表示）

⑨〈追悼・直原弘道〉「一乗寺鉄男さんに出会ってから」三宅武（別枠に表示）

⑩〈詩評〉「矢向季子のこと」季村敏夫

⑪〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽安永稔和『一行の詩のためには』（沖積舎）▽安永稔和『神戸わが街』（神戸新聞総合出版センター）▽玉川侑香『戦争を食らう　軍属・深見三郎戦中記』（風来舎）▽山崎啓治『もっぺん』（ブイツーソリューション）▽増田まさみ句集『遊絲』（霧工房）▽佐伯圭子『空ものがたり』（編集工房ノア）▽佐藤勝太『生命の絆』（文芸社）

⑫〈報告〉常任理事会の報告

⑫〈会員の発行書／会員の詩誌〉

★第42号（２０１７年12月１日発行、８頁）

①〈イベント〉２０１７年度「詩のフェスタひょうご」が10月８日神戸市中央区のラッセホール・リリーの間において開催された。司会の時里二郎副会長より開会が告げられ、たかとう匡子会長が開会として詩人・平田俊氏を迎え、「詩を書く時間―言葉をころがす、言葉につまずく」というテーマで講演があった。第二部は司会の北野和博により朗読会が行われた。16名の参加者があった。二次会の会場はスペイン料理カルメンで行われた。

②〈講演記録〉平田俊子氏の講演「詩を書く時間―言葉をころがす、言葉につまずく」報告者・森田美千代（別枠に表示）

③〈報告〉「現代詩セミナー・神戸２０１７」で行われた倉田比羽子氏の講演「輝け女性詩　新しい戦慄を求めて」について。報告者・牧田榮子

⑦〈連詩〉「連詩　神戸・秋というタイトルに寄せて」詩誌「現代詩神戸」の諸氏による五行詩／大賀二郎→かはらおさむ→中川道子→佐藤勝太→西村好子→宮川守→春名純子→岩崎英世→水こし町子→永井ますみ→三宅武→豊原清明→渡辺信雄→小西誠→田中信爾→張華→井口幻太郎

④〈詩評〉「矢向季子のこと・続」季村敏夫

⑤〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽鈴木賀恵『ムーブメント―花―』（編集工房ノア）▽今村欣史『触媒のうた』（神戸新聞総合出版センター）▽瑞木よう『桜の空』（竹林館）▽田中信爾『Songs』

②〈講演記録〉平田俊子氏の講演「詩を書く時間―言葉をころがす、言葉につまずく」報告者・森田美千代

司会者の時里二郎さんが「プロフィールの紹介、興味深い話が聞かれるでしょう。ことばのシャワーを浴びてください」と話された。次に実行委員会会長たかとう匡子さんからは、「平田俊子さん（写真）の詩は、内的描写力に仕掛けがある。日常にあると思い読んでいると詩の作品として読んでしまう。ブラックユーモア・仕掛けがある。作品としての作者と詩の主人公とは違う。その仕掛けを見破ってもらったら」との話でいよいよ平田俊子さんの登壇である。手にはなぜか小さな透明な瓶を持っている。軽やかな声で話が始まった。「神戸入りは久しぶりだがほっとする」と神戸人の心に入ってきた。京都に11年、その他６年関西で暮らしたことで関東（東京）との違いから話が始まった。例えば、東京では食事では最後に必ず一つ残す。関西は最後まで食べる。食べないままにすることで遠慮の心を表現しているようだ。また「～かしら？」「じゃん」「なのね」と男の人でもいう。西と東の分厚い壁かおる。関東では、関西で通じていた冗談も通じない。

そこで、尼崎の園田に住んでいたが大阪を西として過去をネタにした『（お）もろい夫婦』が朗読された。音の響きや言葉に引きずられていく。言葉がどんどん変質いく感覚である。ご主人は岐阜県で中部地方だが東側にした。作品化をするためには、西側、東側で多少フィクションしながら敢えて変えていく。詩をおもしろくするために必要である。創作はフィクションを混じえる。漫才風であったり、東京への反発であったり「いかにも詩でございます」への反発である。平田さんは、どんな苦しい生活の中でも「詩を書くことは手放さず没頭してしゃんとしていた」と話す。悲しいとか寂しいとかをテーマにして書いたらと、思潮社から進められたけどありきたりのことは書きたくなかった。そこで、尼崎（あまがさき）を雨傘期（あまがさき）として墓でのくらしを詩にした。字を変えると普通の「尼アマ」を雨傘期にすることで新しいイメージを作る。ことばをころがす↓ことばをころす。「が」だけ取っただけで違ってくる。この詩は父が死んでいるが、実際には死んでいない。「夜ごと太る女」→まさに太る。タイトルにも気をつけている。

関西弁＝方言はよその国のようで聞いて楽しい。関西でないとわからない言葉がある。関西にいたとき「自分は？」と友人に言われて「わたしのこと？」と戸惑ったことがある。関西でないとわからない。よそものだから、詩にすることやしゃべることが難しかったおかげで関西弁の詩を書きたくなった。『戯れ言の自由』の「あかん」はことばが捕りついた物を書き取るうとして詩になった。

四人の作家を例に上げて、その土地土地の言葉（会話）に注目していくとよく分かる。まず、幸田文の随筆「秋の電話」では、東京の山の手の雰囲気が感じられる。日本語の品のいい会話がやわらかで心が温かくなってくる。また、同じ東京でも沢村貞子の「わたしの浅草」に出てくる「あたりみかん」という言葉から、下町の人情かおり浅草の元気で威勢のいい会話がある。林芙美子の「風琴と魚の町」の母と娘の言い合いは門司の方言の良さが出ている。そして、登壇した時に持っていた小さな瓶は次の佐多稲子の小説『キャラメルエ場から』に出てくる化粧品の瓶だった。長崎から出てきているのに父と娘の会話に長崎の方言は使っていない。それではリアルでない。もっと方言を使っていたらイメージが変わっただろう。

会話には心と心のやり取りかおる。それを詩の中に取り入れていくことを知った。平田さんの詩の出発点は、草野心平の「秋の夜の会話」である。会話が詩になる。詩は誰かに向かって書いている。

詩は難しいが、なにものにも替えがたい時間である。「いつでもやめてやらあ」と思ったが、止められない。どこまでいけるか。一作一作新しい試みをして見極めるため書いていくだろう。

明るく強くそして楽しく話されてから、最後に「犬の年」を朗読された。笑える詩は下品で軽く見られる。しかし、詩らしい詩ばかりでなく軽く思われるようだが捻くれ意識と思われるようなのを書いてみた。孤立を恐れてはいけない。同人・現代詩人会も一切入っていない。一人で細々とやっていると締めくくった。

その後は、質問に楽しく答えてくださった。心に残った言葉として「日本語の言葉の豊かさを会話にとり入れることで難解さから防御できる」「落語が好きで見ていると日本語をころがす、ふみはずす、アクセントがある。それを詩の中に入れる。現実を書く」「隠岐島に育ったが後ろ暗さを笑いで転化したのかもしれない」また、「文字変換から詩が構築されている。それは、言葉を並び替える。言葉遊びをしている」と話された。

言葉をころがすとは、言葉と遊び、音の響きに耳を傾け、言葉に引きずられてどんどん変質いく感覚を味わうということだろう。

詩集『戯れ言の自由』をけじめ、言葉遊び的な詩を得意とする。意外な言葉どうしのぶつかり合いを楽しみながら、会話や方一言を取り入れることで人情や暮らしまでイメージする。素朴な中から詩を紡ぐ手法に会場のみんなは感銘を受けた。楽しく詩を書く、詩はしかめっ面して問うものばかりではない。もっと楽しいものだ。詩作そのものの喜びを率直に記すということを話された。

朗読あり笑いあり示唆にとんだ話ありで、あっという間に時間が過ぎた。〈第42号〉

③〈読書会〉第12回読書会　「平田俊子の詩について」
2017年7月29日　私学会館 チューター　野田かおり
報告者・黒住考子

連日の記録的猛暑の中、三十五名の出席でした。冒頭、チューターの野田さんは、自分と詩の書き方の違う人の詩を読んでみたかったと率直に立場を表明。

まずその詩について。平田自身が「言葉遊びや笑いのある詩を大事にしたい……その上で単なる遊びで終わらないような心の強さも持ち合わせたい」と語っていることが紹介された。そして『詩、ってなに？』(「小学館ごムック」) をテキストに、ウーロン茶→チャーリーチャップリン→ラ・マンチャの男、と茶の響きから連想を拡げていく詩法を例に、連想を構造的に組み立てながら詩を書いていく手法を紹介。まさに言葉を遊びながらその心（しん）の強さを展開していく良い例だと思った。また詩という小さな容れ物にはテーマを絞って掘り下げていくことが大切であること、詩を決めるには名詞が大きな役割を負っていると思っていると平田は丁寧に語っている。

野田さんは、１９９３万年の『(お) もろい夫婦』あたりから実体験を題材に、その詩法を変化させていったと述べている。そして呂冨年の『戯れ言の自由』を中心に話された。岡井隆の「…面白くて笑いながら読んでゐるうちに、だんだん、詩集の奥まで読むときには、すっかり真顔になってゐるという、タネも仕掛けもある詩集である」という評をひいて、現実にがんじがらめにならない、言葉の自由を確保しなければならない地点から詩を書こうとしていると強く感じたと述べている。中には戦争の記憶とダイレクトに結びついた詩もあって、社会性を言葉の問題として取り組もうとした立場を、岡井隆との対談で平田自身が語っている。「言葉が自由に呼吸しているというか、言葉や発想の自由さを活かした詩を書きたいとずっと思っています。…自分の中に一旦沈めて、時間が経ったあとで…どこかで意識して書くくらいの方が自由度の高い詩ができるんじゃないかな…」と。その言葉には世界に対する自分との距離の取り方をきっちり考えて表現の問題にしていく態度がよく現れていると思う。野田さんは、始めは何でこんなにダジャレが多いのかと思ったが、再読するたびに重たい詩だなと思うようになったと述べている。

やはりレジメの中にある「…詩にはいろんなタイプがあります。…自分の性格や好みや生理や考え方にあう詩を書いていけばいいのです。」という平田自身の言葉。当たり前といえば当たり前ともいえる詩への対し方だが、そこにはむしろ毅然と、女性性を越えて自分ということで書いて来たという心（しん）の強みがみえるように思った。

チューターの報告の後、「言葉のはずし方、あるいは転がし方のうまさ」「個人的体験を題材としながらあくまで表現上の問題として書く姿勢」「あり得ない不条理の世界を言葉で実現してしまう手法」「社会への対し方と表現の問題」「詩あるいは言葉の自由度とは？」などそれぞれの問題意識からの発言が為された。中で「落下」という詩をあげて、終わり三行をどう読むかで、詩の印象や意味が変わってくる、という指摘があり、どう読むかは読み手の詩や社会への問題意識の現れでもあると実感。

私は事前の読書で必ずしも平田詩を楽しめなかったが、言葉のリズムがしっかりあって、そのリズムに乗ることでようやく読める感じがあった。今回のリポートを聞いて、その詩への対し方が見えてきたとき、各自にあう詩を書けばよい（読めばよい）との言に頷いた上で、違和感を持った詩をも受け入れて読める、柔らかさを持ちたいものだと思った。

１０月《詩のフェスタひょうご》の講演会のタイトルは「詩を書く時間―言葉をころがす、言葉につまずく」である。意味性が重視されがちな現代詩をもう少し言葉と遊びたい、言葉で遊びたいという思いから書いていこうとその領域を拡げる仕事をされている平田さん。さてご本人からどんなお話がきけるだろう。〈42号〉

③〈読書会〉第13回読書会「生誕99年黒田三郎の一生に寄り添う
2017年12月2日県民会館／チューター・野口幸雄／
報告者・植村孝

まずチューターの野口幸雄氏の自己紹介から始まる。ご自身の著書『妻が出かけた日』と詩誌「風の音」について語られ、詩を書き出したきっかけはフォークソンググループの「赤い鳥」が歌った「紙風船」に影響を受ける。その後「紙風船」の詩を書いた黒田三郎に傾倒していく。野口幸雄氏は四十年も前にフォークソングの詩も書かれてレコードも出されたようだ。又まだ詩を書き始めて六年だそうだ。

野口幸雄氏は黒田三郎の詩を細かく分析し解剖するのに二十数冊彼に関する本を読んで今回の読書会に挑まれたようだ。実に細々かに講演されて分かりやすく黒田三郎の功績をあらためて知らされた次第だ。

黒田三郎（くろださぶろう、1919年〈(大正8) 2月26日～1980年(昭和55) 1月8日〉広島県呉市出身。呉海兵団の副団長であった父・勇吉（海軍兵学校第二十一期）の退役に伴い、三歳からは、父の故郷・鹿児島で育つ。東京大学経済学部卒業。戦時中、会社から派遣されたり現地召集で南洋の島々で過ごした。戦後はＮＨＫに入局し、一九四七年、詩誌「荒地」創刊に参加し、詩や評論を発表する。結核の闘病を続けながら、市民の生活に根ざした感情を平明な言葉で描いた。

以下黒田三郎の詩を朗読しながらエピソードと持論を展開され語られた。黒田三郎が18歳の時北園克衛のＶＯＵに参加して「け罌し粟」を発表。それを朗読。23歳で大学を卒業すると民間人としてジャワに行き銃を持つことなく知識人として現地で暮らす。引き揚げてきてから詩のスタイルも変わりひとりの人間が自分の目で見、自分の耳で聞き、自分自身で感じ、自分自身で考える、自分の体験したものだけを詩にすると言う信念に傾いていく。

黒田三郎が28歳の時出版した詩集『ひとりの女』空前の大ヒットになる。そのひとりの女こそ黒田三郎の妻である。「ぼくはまるでちがって」「それは」を朗読。『失われた墓碑銘』から「ああ」。『小さなユリ』から「夕方の三十分」「ぼくを責めるものは」を朗読。五年間に六編しか詩を書かなかった時期の詩集『渇いた心』から「引き裂かれたもの」婦人雑誌に書かれた『もっと高く』から「海」をそれぞれ朗読。49歳の時上梓した詩集『ある日ある時』から「ある日ある時」を朗読。詩集『羊の歩み』から「誕生日」と「日常」を朗読。50歳の時ＮＨＫを退局後書いた詩『悲歌』から「風邪をひいて」を朗読。60歳の時急性肺炎で入院したとき上梓した『死後の世界』から「死後の世界」朗読。

最後に大西隆志氏が「紙風船」を歌い終了。

黒田三郎は荒地派の詩人だが田村隆一や鮎川信夫、北村太郎等と違い社会派で生活詩や民衆詩を得意としている。その当たりを野口幸雄氏は実に丁寧に細かく黒田三郎を人間のドラマとして話された。

黒田三郎を読むと言葉の使い方がシンプルでその当たりからも明快さとやさしさが伺える。黒田三郎の詩の朗読と説明で人間黒田三郎も見えてきた。質疑応答も含め意義ある二時間で野口幸雄氏の講演によってあらためて黒田三郎の真骨頂と新発見を見た気がした。

〈43号〉

★第43号（2018年7月15日発行、8頁）

①〈総会〉▽第22回兵庫県現代詩協会の総会が5月6日（日）午後13時30分より、今回は場所を西宮市に移し、西宮市民会館で開催された。

②〈講演記録〉総会第2部／講師・大橋愛由等／テーマ「沖縄詩が撃つもの詩・言葉・思想」／報告者・高谷和幸

5月6日(日)に西宮市民会館で兵庫県現代詩協会の総会があった。これはその時の大橋愛由等氏の「沖縄詩が撃つもの―詩・言葉・思想」という講演のレポートと、私的な感想を交えたものです。

大橋氏は阪神・淡路大震災から毎年続けている奄美への生命回帰ともいえる旅を続けてきた。その大震災の経験が今回の沖縄の広い意味で詩・言葉・思想に複雑に入り組んだ根底に通底するものとしてある。そこからは「わたしの言葉、そして詩って何？」という問いが絶えずなされてきたと想像される。そしてその問いはわたしたちにとっても警鐘となるものであるし、気づきを起こさせるものだった。

まず、当日配られた資料から、沖縄戦後詩をめぐる状況から。「沖縄戦・焦土化（まま）米軍政府とのあらがい」「琉球大学に依拠する詩人たち」「反復帰闘争・復帰後の幻滅・自律の模索」「詩の自律・個の風土への縦深化」「状況氏詩をめぐる論争」と順を追いながらの話があった。情報として多すぎてそれを二言で振り返ることは不可能であるが、（スマフツ）という母語の、それも一概には言えないのだが、数多くの島々地方で醸（竹林館）▽植村孝『水の化学者になると』（私家本）▽関はるみ『黒き猫』（コントラルト文庫）▽野口幸雄『妻が出かけた日』（澪標）▽尾崎美紀『出発はいつも』（空とぶキリン社）▽水こし町子『いくつもの月』（砂子屋書房）▽長尾佳枝『ばらササユリ』（編集工房ノア）▽玉井洋子『霾る』（澪標）▽中堂けいこ『ニューシーズンズ』（思潮社）

⑥〈報告〉第12回読書会について／「平田俊子の詩について」二〇一七年七月二十九日　私学会館／チューター野田かおり／報告者・黒住考子（別枠に表示）

⑦〈報告〉常任理事会の報告

⑧〈会員の発行書／会員の詩誌〉

成されたそれぞれの異言語をいかに大切にしてきたか、それが日本語の表記となるように強制された時にいかに精神的な崩壊にまで及んでいるか、であったと思う。資料には高良勉や山之口獏などよく知られた詩人のほかに、新川明、川満信一、清田政信、中里友豪、新城兵一の詩が取り囲み一つの視覚的な宇宙を形成していることも注意を促したい。

二枚目の資料には現代沖縄文学の思想、情念の力学、信念の力学など岡本恵徳、清田政信の著作物のコラムの紹介。二面には山之口獏研究から知念榮喜、仲里効、岡本恵徳の著作物のコラムの抜粋があった。「山之口獏の彷徨（さすらい）は近代社会へのあらがいであり、かつ沖縄人（ウチナーンチュ）として日本と日本人との距離をまさぐる詩的営為であった」、と大橋白身のコメントが挿入されている。ここで小休止となり、常任理事の大西隆志が山之口獏の「生活の柄」の詩にフォークシンガーの高田渡が曲を付けた歌を、バンジョーの伴奏により歌っている。

三枚目の資料には見出しとして「沖縄の詩人たちは本土（ヤマトウ）の詩人と異なる位相で詩と言葉に向き合っている」あるように、南海日日新聞に掲載した大橋愛由等のコラム全文と松原敏夫詩集『ゆかいなブザのパリアー』の書評がのっている。ここにきてようやく大橋自身が自分の言語、自分の詩を念頭に置きつつ沖縄の詩人たち、沖縄の文化・思想に係ってきたかが語られているように思う。

講演の内容を時系列に並べてみたが、私としての感想、気づきがどこにあったかを書いて締めくくりたい。言葉を、まして自分の言葉を言葉として自覚することは困難なことであるが、詩を書くという差し迫った状況の中で言葉と向き合うだけでなく、その出自となる言葉を考えることは詩を考えるところの段階で、自覚的に唯一できる詩への一歩であるのではないかと思う。そのきっかけを与えてくれた貴重な講演であった。

③第13回読書会「生誕九十九年黒田三郎の一生に寄り添う 2017年12月2日県民会館／チューター・野口幸雄／報告者・植村孝

④〈報告〉第5回文学紀行報告「須磨寺と周辺の散策を楽しむ」報告者・北岡武志

⑤〈報告〉第7回ポエム&アートコレクションの報告

⑥〈講演記録〉『竹中郁、神戸という風土が生んだモダニズム詩人』講演趣旨と感想　和比古

「兵庫・神戸を生きた詩人を語る」シリーズの、足立巻一、綾見謙、中村隆、君本昌久に続く五回目の講演である。

竹中郁は神戸に生れ住んで、モダンな風土を詩の糧に新しい詩の精神を呼び覚まし、近代的なモダニズムの詩を書いている。時代の風をうまく背負って生きた竹中のモダニズムに講演では焦点があてられていた。

モダニズムとは20世紀文学の一潮流であり、都市生活を背景にし、既成の手法を否定した前衛的な文学運動である。まず、リアリズム、抒情との対比でモダニズムについて説明され、各々の詩の背景についても述べられた。特に関西のモダニズムについてその特徴を示された。また、抒情詩人とモダニズム詩人との違いを明らかにすることにより、モダニズムの位置づけをされた。モダニズムでも一味違う安西冬衛との比較論も展開され、竹中を育てた灘という地域で、日常性の分野、抒情詩の領域を深く自分の詩を溶かし込んでいる。

竹中の9冊の詩集を紹介し、戦後の昭和23年の第7詩集『動物磁気』から第8詩集『そのほか』までは20年間も空いていると指摘され、全詩集に関してもその経緯を述べられた。第1詩集から「庭」、「晩夏」などを取り上げ、特にこの二つの詩に関しては情景説明とともに、いかにモダニズム的な詩であるかについて解説がなされた。また、『動物磁気』の連続した短詩を取り上げ朗読解説された。『そのほか』などではさらなるモダニズムの変貌があり、その軌跡も簡単に紹介されている。

一方、兵庫高等学校などの校歌などを多く書いたことで広く知られ、その詩を検証された。最後に、同じタイトルの草野心平の詩を引用し両詩の特徴を述べ、講演を終えられた。

以上、竹中郁の人となり、生き方、詩について概説された。約40名の聴衆は熱心に耳を傾けていた。

⑦〈開設〉待望の兵庫県現代詩協会のホームページが立ち上がった。http://hyogopoetsry.sakura.ne.jp/main/

⑧〈連詩〉「連詩〈白秋〉の巻」詩誌「Messier」の同人諸氏による連詩／香山雅代→内藤恵子→佐伯圭子→香山雅代→佐伯圭子→内藤恵子

⑨〈エッセイ〉『尹東柱（ユンドンジュ）を巡る旅』西海ゆう子（別枠に表示）

⑩〈詩評〉「水町百窓のこと」季村敏夫

⑪〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽佐藤勝太『佇まい』（コールサック社）▽あだちかつとし『記憶』（私家版）▽和比古『人間の構図』（ユニウス）▽福田知子『あけやらぬみずのゆめ』（港の人）▽山本眞弓『五月の食卓』（澪標）▽鳥巣郁美『時刻の帷（とばり）』（コールサック社）

⑫〈報告〉常任理事会の報告

⑬〈会員の発行書／会員の詩誌〉

---

⑨〈エッセイ〉『尹東柱（ユンドンジュ）を巡る旅』西海ゆう子

始まりは、随分と昔に読んだ茨木のり子作品だったと思うが、定かでない。それでも植民地から同志社大学へ留学、ハングルで詩を書いた、治安維持法で逮捕され獄死した等が、記憶の底に残っていた。現在も命日に詩碑の前で追悼会かおり、宇治にも新しく詩碑が建ったと友人から聞いていた。昨年がちょうど彼の生誕百年にあたり、所用でソウルへ行った時、二〇一二年にできた「尹東柱文学館」を訪れた。隣国の近代史に興味があり、これまでに「戦争と女性の人権博物館」や「西大門刑務所歴史館」にも行っている。日本人には辛い場所だが、私には避けて通ることができない過去でもある。

文学館は地下鉄景福宮駅からタクシー七分程の距離で、駅からバスの便もある。入場料無料。元水道加圧場（水の流れに圧力を加え再び強く流れるようにする施設）で、館内は彼の詩に書かれた空や星を象徴するような雰囲気が漂っていた。日本語パンフレットには一世に疲れ、妥協しながら卑怯になった私たちの魂に尹東柱の詩は美しい刺激を与えてくれる。そして魂の流れを整えて新に流れるようにしてくれる。尹東柱文学館は私たちの魂の加圧場だ―とある。水に関連して、詩「自画像」の井戸からモチーフを得て、使われなくなった水槽を上手に利用していた。定期的にＤＶＤも上映され、ハングルがわからなくても彼の生涯が理解できるようになっていた。入場者も多く根強い彼の人気がうかがわれたし、案内板には詩の朗読会のお知らせもあった。

戻って岩波文庫版詩集（金時鐘訳）を読み直し、民族詩人と言われているが、治安維持法で逮捕されるような詩とは、とうてい思えなかった。時を同じくして、生誕百年を記念した墓参りツアーに行った人の報告では、生地は現在中国吉林省延吉市、十九世紀末朝鮮から人々が集団移住した明東村（抗日地域）である。さらに彼がクリスチャンだったことも特高に目をつけられる理由だったらしい。丘の上の墓参りをした彼女は、墓を背にして向こうの山々の緑とふもとの村を見たとたん「天と空、風を感じた」とまるで詩人のような言葉を発したと記している。あの地にはそうした力があったのだと。

二十七歳の非業の死に、想像を掻き立てられる。彼をテーマに書き始め事情あって中断、一月のアート展は第一章のみで出品した。いずれと考えていた時、本会の大橋さんから追悼会に誘われた。二月の京都は厳寒、それでも二月十六日福岡刑務所獄死を想うと、まだ足りない気もした。ソウルから美術家が参加、「星を数える夜」（上野都訳）をアート作品にして詩碑の傍らに掲げ、自国の若い詩人の為に集まった人たちに、熱い労いの言葉をかけてくれた。献詩とフラメンコギターの献曲で、凝縮した時が流れて行った。彼は追悼するひとりひとりの中に確かに生きている、太陽でも月でもなく星として。私たちとは別に若い韓国人たちも訪れ、また花束も沢山捧げられていた。

彼の詩人としての評価はそれぞれに任せて、二十七年の生か、私たちにいろいろなことを語りかける。彼には私たちを書くことに駆り立てる何かがあって、それが今なお愛される理由かと思う。彼の足跡がまだ韓国にも残っている。日本で詩を書く者としてソウルに出かけ、ソウルの詩人達とコラボできたらまた新しい何かが生まれるのではないかと。出かけませんか、韓国は余りにも遠くそして近い国なのだから。

〈第43号〉

★第44号（2018年12月1日発行、8頁）

①〈報告〉2018年度「詩のフェスタひょうご」・盛会のうちに終わる／報告者・神田さよ

10月14日、ラッセホール・サンフラワー（神戸市中央区）において2018年度詩のフェスタが行われた。今年度は兵庫県政一五〇周年記念イベントとして企画、準備した。例年は、講演会と自作詩朗読会を行うのだが、伊藤比昌美さんの講演、更に伊藤比呂美さんと平田俊子さんの対談、自作詩朗読会を企画した。参加申し込みは事務局に連絡が入るが、講師両氏がツイッターなどで告知してくださり、また、今年度より協会のホームページが開かれたこともあり、開催直前までメールや電話でうれしい忙しさだった。

13時より尾崎美紀さんの司会で開始し、たかとう匡子会長の開会の挨拶につづき、伊藤比呂美さんによる「カタるウタう　ノロう」の演題で講演が始まった。語りかけるような講演で、参加者との距離を感じさせないお話しぶりに、皆、引き込まれていった。伊藤さんの言葉は肉体化していて、観念ではないことばの響きに魅了された。朗読もずんずん胸に入り込んでいく。あっという間の一時間だった。

その後、伊藤さんと平田さんとの対談が「詩を生きるということ」と言うテーマで行われた。こちらの配慮が足りなく、ステージを設けなかったので、お座りになると後ろの方に見えないのではと、講師からご配慮をされ、お立ちになって対談をされた。お二人の異なる個性が発揮され、また、お互いに尊重し合い、とても良い対談となった。対談もお話に引き込まれてあっという間に終わった。しかし、詩の芯はしっかりと受け止められた対談であった。平田さんは、昨年も詩のフェスタに講師としてお越しくださり、今年も是非というリクエストに応じてくださった。

第三部自作詩朗読会は北野和博さんの司会で進行された。当初、十四人の応募で時間内に収まるか懸念していたが、13人の朗読者がスムースに行ってくださり、ぴったり予定時間に終了した。朗読参加者は岡山、和歌山、京都、大阪からと広範囲から応募された。

時里二郎副会長が終わりの挨拶をして、全てのプログラムが無事終わった

②〈講演記録〉伊藤比昌美さん講演／テーマ『カタる、ウタう、ノロう』

伊藤比呂美氏（左）と平田俊子さん（右）

◇伊藤比昌美さん×平田俊子さん対談
タイトル『詩を生きるということ』
講演趣旨ならびに対談趣旨（別枠に表示）

③〈読書会〉第14回読書会　伊藤比呂美の詩について2018年七月28日　私学会館　チューター・寺田操／報告者・森田美千代（別枠に表示）

④〈会員詩〉田村周平「奇跡」

⑤〈報告〉第6回　文学紀行「神戸・平野界隈を巡る」

⑥〈評論〉▽『街貌』創刊号について／季村敏夫▽きっといいことがある―内田豊清のこと／季村敏夫

⑦〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽北岡武司『鳩は丸い目で』（和光出版）▽井口幻太郎『みずいろの含羞』（摩耶出版社）▽香山雅代『雁の使い』（砂子屋書房）▽永井ますみ『万葉創詩―いや重け吉事』（竹林館）▽永井ますみ『永井ますみの万葉語り』（竹林館）▽月村香『蜜雪』（思潮社）▽以倉紘平『気まぐれなペン』（編集工房ノア）▽由良佐知子『遠い手』（澪標）▽高木敏克『港の構造』（航跡社）▽宮浦久子『マスクをすると』（濡標）▽以倉紘平『遠い蛍』（編集工房ノア）

⑧〈報告〉常任理事会の報告

⑨〈会員の発行書／会員の詩誌〉⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮

★第45号（2019年7月1日発行、8頁）

①〈総会〉第23回兵庫県現代詩協会総会が5月6日、兵庫県私学会館で開催された。時里二郎の開会挨拶に引き続き司会の神尾和寿によって玉井洋子会員を議長に選出。事務局神田さよ・会計玉川侑香・会計監査梅村光明が報告。次いで2019年度活動計画案・2019年度予算案をそれぞれ新事務局山本眞弓・会計玉川侑香が述べた。最後に規約改正を時里二郎新会長から提案され異議なしで承認された。

②〈時里二郎新会長挨拶〉「たかとう匡子さんのあとを引き継ぎました。兵庫県現代詩協会は1997年に設立されましたが、言うまでもなく、1995年の阪神・淡路大震災という未曾有の体験を受けての協会発足でした。震災の惨禍を越えて、兵庫県に在住する詩人たちが結集し、いち早く震災詩集のアンソロジーを刊行したことがきっかけで生れまたことは、この協会の原点として忘れてはならないことです。

③〈読書会〉第15回読書会
「藤富保男　アバンギャルド・エッセン」チューター・坂東里美
報告者・関はるみ

師走とは思えぬ暖かい日、詩の言葉の妙を学んだ。2017年9月に89歳で亡くなった藤富保男の作品を20年近く親交のあった坂東里美氏が同じ詩人の目で分析された。

冒頭で、日本の前衛詩人として70年近く詩の実験を繰り返し、その可能性を追求した藤富保男の詩はユーモア溢れる詩ですから、今日は大いに笑ってよい読書会です、と話された。藤富は、1928年東京生まれ、現・東京外国語大学モンゴル語学科卒。公立中学校教師、大学講師であったが、東京オリンピックのサッカー役員（サッカーの名手だった）でもあり多才な人物であった。23歳で第一詩集『コルクの皿』を刊行した頃からE・パウンド、その弟子で当時進駐軍として来日していたM・レックと知り合い、カミングズの翻訳詩集を出版。世界の詩へと目を向けることになる。国内では、戦前からモダニズム詩を牽引し戦後も活躍していた北園克衛、北川冬彦、西脇順三郎らと詩活動を続けた。藤富は、ユニークな良い意味での奇人変人、大変魅力的な奇才で、若い詩人たちがいつも彼の側に集まって来ていた。藤富保男氏の詩活動は大きく分けて、詩・視覚詩・カミングズやサティの翻訳の三つであるが、その他にもプライベートプレス「あざみ書房」の社主、音楽と朗読のコンサート「詩を奏でる」の公演など多彩な活動をしていた。

藤富保男の詩についてのキーワードとしてシュルレアリスムとイマジズムの2つを挙げられた。藤富の詩はシュルレアリスムの絵を文字を使って表現しようとするものだった。それを説明ではなく詩として定着させるためイマジズムの手法を使った。イマジズムとは、言葉によって絵画的イメージを読み手の眼前に映像として浮かび上がらせる、想像させようとする詩である。藤富の詩の特徴としては、明確に表現するために異常な比喩を用いたり、地口の多用や、文法を破壊してわざと辻褄の合わない表現を用いたりした。常套句を嫌悪し、新しい発想を持たない詩に対しては手厳しい詩人であった。しかし、その発想の基盤は、日常体験の中から得られたものでなくてはならないという考え方で、自分の中を通過した体験を想像力で変形させ、最初の姿がわからなくなるくらい変形の後、浮かび上がってくる「物凄い現実」を記述するのが彼の詩であるとのことだった。

藤富の代表的な作品を3つ挙げて具体的に詳しい分析と解説がなされた。「仕方が泣く頃」では、秋風の吹く男と女の極彩色でセンチメンタルな組曲的詩であるが、地口を多用し、言葉をずらしながらコミカルで切なく、この言語センスは天才的である。「六」は、六時に女と待ち合わせをしている男が待ちぼうけを食らっている状況であるが、話しが少しずつずらされて、一人の女が六時という時間になり、六時の待ち合わせの場所になる。六時が擬人化されて最後には焦燥感だけが漂う詩となっている。「没落の象徴」は、作品の中に隠し文字が埋め込まれたアクロスティック（折り句）の詩になっている。単語を分解して表記しているところは、スローモーションのコマ送りの効果を狙っている猫退治のユーモア溢れる詩。3作品とも詳しい解説があり、難解と思っていた藤富保男の詩が解きほどかれて理解が進んだ。

最後にCDで藤富の詩「狂詩曲・鈴木清」の朗読を聴く。新聞記事で「鈴木」という姓が多いと知り発想。想像力の膨らまし方は凄い。18分程の長い作品だが、藤富の声を聴くことができ、より身近な詩人に思えた。質疑応答では、情緒をどのように考えていたのか、最後まで前衛だったのか、時代性との関連はどうだったのか、短い詩から長い詩に移行したのはどうしてなのか等、多くの質問が出て、2時間の予定はあっという間に過ぎた。今まで難解と思っていた藤富保男の詩がストンと身体の中を通り抜けて落ちる感がして、固まった脳も少しは快感を共有した。

最後に私事だが、藤富保男氏は几帳面な方で、私の詩に対しても度々感想を下さった。一昨年の6月24日付の手紙が最後で、7月5日に入院、体調最悪の時であったと後で知り恐縮するばかりだ。今回記録係を担当して藤富氏への想いが再び蘇った。〈第45号〉

②〈講演記録〉伊藤比呂美さん講演／テーマ『カタる、ウタう、ノロう』▽伊藤比呂美さん×平田俊子さん対談／タイトル『詩を生きるということ』／報告者・神尾和寿

今回の「詩のフェスタひょうご」における講演の部は、大変、贅沢な形となった。すなわち、伊藤比呂美さんの講演を第一部とし、引き続いて、盟友と言える平田俊子さんとの対談も第二部として催されたのである。ちなみに、平田さんは、前回２０１７年度の「詩のフェスタひょうご」にお招きした講演者でもある。そして、昨年の参加者は、一層心を躍らして本年も来場したはずである。

さて、「詩は病である。詩人にしても詩の読者にしても、病人である」との挑発的な宣言から、第一部の講演は始まった。

教養としての詩が語られるのではなく、これから、言葉を備えた生き物にとっての、いわば業と救いの次元で詩というものが突き付けられるのだなと、われわれは直感できた。何らか身につまされて柔らかな笑い声が起こる一方で、期待感と緊張感とに、会場は一気に包まれた。伊藤さんの手元に、準備稿はない。

基本的に、生活遍歴とともにそのつど訪れた言葉をめぐるさまざまな原体験を軸にして、話は進んでいく。

そのなかでも、九〇年代から十数年間にわたる異国アメリカでの生活を通して為された経験が、決定的だったようである。それは、日本語喪失の危機と、先住民であるインディアンに詠われてきた詩との出会いである。

こうした過程を経て、言葉の再発見に至る。『古事記』や、とりわけ説教節に、伊藤さん自身にとっての現代詩の原点が見出される。そして、その本質は「カタり」にあると確信される。

ここで、演題の意味するところが、（現代）詩を構成する根本的な三要素として解き明かされる。筆者が理解したところでは、次のとおりである。

まずは、「カタる」とは、生まれてきた誰かがそれぞれに生きていっては死んでいく、その具体的な事実内容を語る、ということ。そして、「ウタう」とは、高いもの（超越した次元）へと声を届かせる、ということ。さらに、「ノロう」とは、言（こと）を発することで事（こと）を動かす、ということ。

ただし、これら三要素の連関についてまでは語られなかった。因果関係とか併存関係とかではなく、いわば三位一体として事実的に起こっているのだろうと、筆者には推測される。

後半に入ってからは、朗読を聴かせていただく機会にも恵まれた。「カタり」の典型と見なされる説教節の『小栗判官』における「道行き」の件の、原文ならびに伊藤さん自身によるその現代語訳の朗読を挟んで、次の三篇が詠われた。

『河原荒草』（２００５、思潮社）から、「道行き」。『あたしはあんじゅひめ子である』（１９９３、思潮社）から、「ナシテ、モーネン」。そして、最新刊の『たそがれてゆく子さん』（２０１８、中央公論新社）から、「なつのおわり。あきのはじめ。」。

小刻みに体をスイングさせながら激しく遺される息を伝って、言葉が届いてきた。「カタる」とはこういうことなのかと、目の覚める思いがした。テクニックの類ではなく、いわば言葉の霊が乗り移って、伊藤さん全体動かしているのだろう。

こうして大きな拍手とともに講演は終了し、次いで、五分ほどの休憩の後に第二部の対談が始まった。

登場されて並び立ったお二人は、もうそれだけで、どことなく嬉しそうである。また、われわれにとっても、視界に届くよう終始ご起立されてお話しくださったことは、ありがたく、嬉しかったのであった。

対談にあたっての両者の役割関係は、漫才の形式に喩えれば、ボケ役の伊藤さんに対して平田さんがツッコミを入れていく、ということでよかっただろうか。つまり、平田さんが引かれたおおまかなラインに沿って、伊藤さんから力強い主張や率直な告白が引き出され、さらにそれに対する平田さん独自の批評に動かされて、豊かな展開が仕組まれていく。

このような具合に和やかで自由な雰囲気で対談は進んでいったのだが、しかし、そこで問われた事柄は、いずれも深刻にして重大なものとして思い出されてくる。とりわけ中心となる二点だけに絞って、確認しておきたい。

一つは、〈詩は、教えたり教わったりする（するべき、できる）ものなのだろうか〉という問いである。お二人ともに、現在は大学等で実作を指導する立場なのであるが、そればかりでなく、かつてのご自身の詩の学びの事情に関しても回顧された。そして、その答えは、簡単には得られなかったように記憶している。

ただし、答えを探るなかで、予感される方向性は示された。それは、詩作する主体を最優先に尊重しながらも、同時に、客観的な視点も提供して意識させてやる、ということである。たしかに、この両面をみずから併せ持っていることが、完成された詩人には要求されるだろう。また、（書く）の前提となる（読む）ということであれば、学校の国語授業での詩教育は貴重であることを、平田さんは強調されていた。

もう一つは、対談のテーマであった「詩を生きるということ」に関わる。問いの形式に整えれば、〈生きるということに、詩はどのように関わっているのだろうか〉。さらに突き詰めて問えば、〈詩なくして、生きるということは成立するのだろうか〉。

この問いに対する答えに関しては、お二人ともに明快であった。すなわち、成立しない。真に生きるということは、詩を生きるということに他ならない、のである。お二人自身の活動の歴史を遡って確認するのみならず、石牟礼道子さんや辻征夫さんらの活動ならびに発言にも言及しながら、こうした結論に至っていた。

「常に、書く、という意識が私にはある。そして、自分が書いたものは、結局のところ、すべて詩である」と、伊藤さんは断言されていた。

はたして、このお二人は、特殊なのであろうか。筆者には、そうは思えない。誰もが、この問いと答えとの間にいるのではないだろうか。ただし、自覚や覚悟という点で、いまだ不十分なのかもしれない。そして、その時までわれわれをずっと待ち続けている言葉の核心こそ、詩と呼ぶにふさわしいものなのかと思う。

〈第44号〉

③〈読書会〉第14回読書会

伊藤比呂美の詩について

2018年7月28日　私学会館チューター　寺田 操

報告者・森田美千代

2018年7月28日私学会館において、第14回読書会が寺田操さんを報告者として開かれた。

詩を書き始める時、出会いはとても大事になる。伊藤比呂美は「新日本文学学校」を受講したときの講師阿部岩夫に出会い、その詩に惹きつけられことが詩を書く動機になったと口火をきり、作品についてていねいに話された。

作品を評価する時、「ほめ殺し」というものがあるが、阿部の批評はそうだった。その後阿部岩夫と藤井貞和発行の同人誌「詩を織る」や「壱拾壱」（佐々木幹郎、清水哲男、ねじめ正一、藤井貞和、吉増剛造等同人）に創刊同人として参加している。有名な伊藤の作品「カノコ殺し」は二五〇行の詩でリフレーンが絶妙で自動記述で書かれているが計算されている。母性神話と闘っているようだ。作品として過激なようだが封印していることを書いてくれると読み手もそれに吸い込まれる。また、現代音楽のパフォーマンスや口承伝承のスタイルをみつけ、後の「説経節」や「般若心経」や「日本霊異記」などに出会う下地になる。

関東では「ひ」を発音すると「し」となる。朗読は活字と文がぴったりしているが、イントネーションでは活字は表せない。言葉は生きもので流動的だから、消えゆく音、消されていく音、混じりあって生まれる音がある。変遷していく音の存在に気づかされる。音声文字として書くことは、表意文字とは同じではない。「朗読」で言葉を通過させ体感し、語りをベースに感覚を総動員している。

作品「小田急線喜多見駅付近」のように関東の人は地名を書く人が多い。また「ポーランド一触触発」は戒厳令下に実際に渡り書いたものである。阿部岩夫は「伊藤の詩はユニークできわだっていた。行わけ詩あり、散文詩あり、朗読が大変上手だった」と言っている。

「この家には階段がある」「この家には怪談がある」と読み違えてしまうのは、生老病死が堆積している「語り」と「騙り」が存在の淵から原初へと降りていく怪談だと考えているからか。「わたしはあんじゅひめこである」は、怖くて残酷な昔話のような詩篇で読み手に思考する時間を与えず、語り手の強い意志を感じる。語り口は説経節である。読者を置いてけぼりにしてしまう。怖いけど美しい。美しいけど怖い。伊藤の詩は性のことが前に出ているが、初めからそういうテーマにしているわけではない。

『日本霊異記』VS比呂美『とげ抜き　新巣鴨地獄縁起』というこの作品は散文と詩を一つの鍋に入れて熟成させているようだ。古典からの本歌取りだが、そうは感じさせない手法である。地表から地下へ、表層から深層へと神話的空間が見えてくる。私的生活をさらけ出すのは本歌取りをとると自分のことであっても自分のことではないように感じられるいい方法である。何度も再生され記憶を映像化している。また、伊藤比昌美はとことん、言葉と格闘する詩人であると言えよう。身体を使い、頭をクリアーにして、自分を、言葉を、ぎりぎりまで追い詰め、蕩尽して、脱皮する。「般若心経」の新訳とエッセーは別々のものではなく、新訳の「アウラ」であろう。介護の現実、生老病死の現実、厄災、身近な素材を書くことで心のなかに溜まっている澱を一気に噴き出す。カタルシスを得ていく。溜飲下っていく。読み解き経本は「詩」であった。生活の中で翻訳とエッセーは結びついている。経本に魅かれた理由は書かれている音だ。

「人の声、草木の声／ひとはどこから来て、どこにゆくのか」の「川原の婆」は一所不在の川原の婆だが、誰の内にも棲みつき、詩人の身体をやどかりにして外部へと出現する。ネットの無い時代のユーチューバーのような書き手だ。最後に石牟礼道子さんを描いた『良い死に方、悪い死に方詩人は死を凝視める事』を朗読され、報告者の寺田操さんは「伊藤さんのようにはできない、なれない、なりたくないけど、どんどん惹きつけられて次へ次へと読んでしまうのが彼女の詩の世界である。」と締めくくった。

伊藤比呂美の詩は一人で読み解くことは大変困難だが、理論的に分析され詳細なテキストを提示されたことで伊藤比昌美の世界に連れて行ってもらえた気がした。「詩のフェスタ」で伊藤比昌美ご本人のお話を聞けること大変楽しみである　参加者23名。

〈第44号〉

たかとう会長の六年間で、協会の活動がしっかりと根付き、会員の方々のご理解とご協力を受けて、充実した活動を続けています今回の総会において、協会の会則が一部改定されました。今までは、「兵庫県に在住、または関係のある詩人の親睦交流を図り」とあるところを、「兵庫県に関係する詩人や詩を愛好する者の親睦交流を図り」と改めました。詩を書く人ばかりでなく、詩を書いていないけれども、現代詩に興味を持って読んでいるといった人たちにも門戸を広げて、現代詩の普及発展に資する活動ができればというのが改訂の趣旨です。今年度も、「詩のフェスタひょうご」、「ポエム&アートコレクション」、「読書会」や「文学紀行」などを行います。会員の方々の参加をお願いします。他にも協会のホームページの充実や会報の発行、名簿の作成など、会員相互の情報の交換や交流を手助けするうえでも、協会がお役に立てたらと思っています。今後ともよろしくお願いします。

〈新役員〉会長＝時里二郎／副会長＝神田さよ／事務局長＝山本眞弓／会計＝玉川侑香／常任理事＝大西隆志・大橋愛由等・尾崎美紀・和比古・北岡武司・北野和博・丸田礼子／理事＝季村敏夫／監事＝梅村光明・渡辺信雄／顧問＝たかとう匡子

③〈講演記録〉総会第二部講演「詩と古代」田中荘介氏／報告者・江口節

〈「詩と古代」田中荘介〉

新天皇即位と改元による十連休には、格差が見え隠れし、マスコミのあおりは、自分の子ども時代（戦時）にもあった流れと同じようだ。熱しやすく群れやすい国民性である。「令和」が国書から採用されたと固執するのは、国粋主義に等しい。日本文化は、元来、渡来したものを取り込んできた雑種文化であり、日本独自であるのは、大和ことばのみである。日本の文化には、大きな変革が二度あった。一つ目は弥生期、漢字の伝来である。二つ目は明治維新の欧化政策である。

五・六世紀は、漢字の導入と習得に努力した。六・七世紀は、中国から導入した合理主義によって元来の呪術的信仰が押され、風土記などに見られるアニミズムの神が追いやられて行く。日本古来と思われている神社も、中国の流れを汲むものであり、中国由来の律令制や官僚組織が整えられて、天皇制を支えていくのである。

こうして歴史を学ぶことは、世の常識の偏りを知ることもあるのだが、津田左右吉は『古事記』『日本書紀』を資料批判の観点から研究し、戦前は不敬罪に問われた。

斎藤美奈子著『私の同時代小説』（岩波新書）は、１９６０年代以降の小説を解説し、小説は段々読みやすく軽くなっている、と述べる。また、堀田善衛著『ミッシェル城館の人』は、16世紀フランスの思想家モンテーニュの人と時代を書いたもの。同じく堀田の『方丈記私記』『定家明月記私抄』なども合わせ読み、人間はどこまで愚かでだらしないのか、と思う。見渡せば、芸術も含め文明は、栄光から衰退へ向かっている、と私は考える。歴史的に見て、現在のように言葉が軽くなった時代はないのではないか。いまや、詩は、すでに使い尽くされた器ではないかと。古来、言霊は、音声によって口から出て来るものと考えられていた。古代人にとって、言うと言わないは全く別物である。

播磨風土記にある「夢野の鹿」の話や他にも、夢を信じて黙っている者と夢を信じないでしゃべる者とでは、その後の運命が分かれることを示す。言葉の重さが、現代とは格段に違うのである。現代では、言葉は神のものから人のものになった。記紀歌謡や萬葉集以前の「語り」が持っていた原始エネルギーが、文字化記録化される中で失われていったのである。その一つは、音声・音律・韻律である。耳という皮膚感覚で受け止めていたものが、眼を通してイメージを再現させるものに変化した。もう一つは、定型や文語の持つことばのしなやかさである。言葉は無化し、裸になって、面白いものがなくなった。これら、失われたものがいかに多いことか。現代詩は、何が失われたのかも分からず、失ったことすら忘れたようである。朗読においても、現代は音韻が単純化しており、古代に朗詠されたものとは異なる。たとえば、「はひふへほ」は、古代では「ふぁふぃふぅふぇふぉ」であった。萬葉集から古代語の発音で朗読する。「春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ」（巻第十九―四一三九大伴家持）最後に、宮沢賢治「原体剣舞連」を朗読する。ここにはまだ、失われた原始エネルギーが残っている。

以上が要約である。最後の2編は、重厚な声の朗読であった。その後、次の質疑応答に、今後の課題が示唆された。

△質問▽今ひとたび言霊を取り返すことができるか？その方法はあるか？△答え▽言霊は返ってこない。記紀歌謡や古典を学び直して、一人ひとりがやり直すしかないのではないか。まずは、現在の危機意識を感じてほしい。（報告：江口節）

④〈報告〉第15回読書会／「藤富保男　アバンギャルド・エッセン」チューター坂東里美／報告者・関はるみ

⑤〈報告〉「第８回ポエム&アートコレクション展」

◇特別イベント「兵庫・神戸を生きた詩人を語るＶＯＬ．６」２０１９年１月19日神戸文学館（講演）たかとう匡子／報告者・丸田礼子

⑥〈文学紀行〉文学紀行エッセイ「平野散策」報告者・関はるみ

⑦〈追悼〉福井久子さん追悼文「海と光と花の詩人」田中荘介

⑧（寄稿）「一九三〇年代モダニズム詩集のこと」⑨「『驢馬』のことなど」季村敏夫

⑩〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽北岡武司『時のなかに』（春風社）▽安水稔和『地名抄』（編集工房ノア）▽黒田ナオ『昼の夢夜の国』（澪標）▽江口節『篝火の森へ』（編集工房ノア）▽中島友子『おくりもの』（編集工房ノア）▽佐藤勝太『夢がたり、昔がたり』

⑪〈受賞〉時里二郎会長の詩集『名井島』（思潮社）が第49回高見順賞、第70回読売文学賞をダブル受賞した。

⑫〈報告〉常任理事会の報告　⑬〈会員の発行書／会員の詩誌〉

★第46号（２０１９年12月１日発行、８頁）

①〈イベント〉「２０１９年度ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご―詩の森に出かけよう―盛会のうちに終わる。

十月六日ラッセホール・リリーで「詩のフェスタひょうご」を開催。午後一時三十分時里二郎会長の開会挨拶で始まり、皆さまの協力と県や芸術文化協会の支援に感謝の言葉が述べられた。

第一部は司会丸田礼子より講師紹介があり、池井昌樹氏の講演が行われた。池井氏は演題「詩と私」についてゆっくり一語一語噛みしめるように話された。なぜ詩を書くようになったのか、なぜ詩は生まれるのか。幼少期から現在に至る詩の歩みについて語り、飾りのない口調で詩の本質に迫り、聴衆を魅了した。マイクの音量もよく内容が聞きやすいと好評であった。

第二部は自作詩朗読会で司会大橋愛由等のテンポの良い進行で14名の朗読者が紹介された。次々と壇上で詩が朗読され、それぞれの思いが吐露された。イメージが広がり詩の森に引き込まれ、詩の森で楽しむことができた。

②〈講演記録〉「池井昌樹氏の講演「詩と私」について／報告者・佐伯圭子

③〈読書会〉「第16回読書会報告／チューター・田村周平『池井昌樹の詩を読む』／報告者・牧田榮子（別枠に表示）

④〈交流〉関西詩人協会&兵庫県現代詩協会交流会／報告者・神田さよ

③〈読書会〉「第16回読書会報告／チューター・田村周平「池井昌樹の詩を読む」／報告者・牧田榮子

豊かな深い森の在り処を知らされた読書会だった。

若いころに出合い、その後友人となるふたりが暮らした東京から語り始めた。池井昌樹は坂出市を故郷とする。一方赤穂から上京した田村周平は馴染みの喫茶店や居酒屋があった。そこで知人の仲介で知り合ったという。年齢も同学年。このあたりのことを田村は、池井の詩に惹かれたというよりも、巷で発行されている詩誌や詩集を知人や仲間たちと読み合い朗読する活動が楽しかったのだと話す。やが工作中でも電話が鳴り「どうだ、いいだろう」とばかり自作の作品を聞かせてくれるが、酒に酔っていたり詩が長〜かったりと、いやはやと言いながらもにこにことこぼれ話を披露し笑いを誘った。

池井昌樹は谷内六郎の絵に惹かれる少年だった。十二歳で詩を生涯書く決意をする。山本太郎選により「雨の日のたたみ」が全国学芸コンクール詩部門特選となる。一連二七行。「／／／暗いにおい／古い宿屋の箱膳のにおい／田んぼのにおう水に流された／かえるの鳴く声が／麻のゆかたを／かびのにおいにしめらす／たんすの引き出しの／古いうめきが／じっとりと聞こえて来る／雨の日のたたみの室／色あせた紙風船が／何でもないように／ばっさりところがっている」（部分）

これをきっかけに一九七一年上京し、すぐ「歴程」同人となり会田綱雄、鈴木翁二らの知遇を得ている。そのスピードある行動は詩の力が引き寄せたのだろう。一九七七年には第一詩集『理科系の路地まで』として発表された。やがて一九九七年藤村記念歴程賞。芸術選奨文部大臣新人賞『晴夜』と続く。その中の「星々」は一連七六行。「むすこよおぼえておりますか……」と、池井昌樹とうちゃんはしずかに語りかける。「おおほいほい　おおほいほい」の合いの手に揺られる年月をたゆとうように詩のこどもは美しい少年になっていく。山本太郎はこの詩を読んで「天才詩人が一所懸命に詩を書いて、結婚してこどもができて、別の大きな歴史に組み込まれていく恍惚と不安を感じた」とヴェルレーヌの詩の一節を挙げて讃えた、と田村は語った。「いきているのかもしれない―『晴夜』後記に代えて」ではその作風に巡り合う時期がさらりと書かれ、興味をくすぐられた。

8月17日西宮市市民会館大会議室において、関西詩人協会との交流会を開催した。当日は厳しい暑さであったが、広い会場は参加者でいっぱいになった。

関西詩人協会代表左子真由美さん、兵庫県現代詩協会会長時里二郎の挨拶の後、自作詩朗読が行われた。江口節（兵庫）、村上うさぎ（関西）、北岡武司（兵庫）、山川方子（関西）、黒田ナオ（兵庫）、名古きよえ（関西）、時里二郎（兵庫）、熊井三郎（関西）計8名の方々。

⑥〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽北岡武司『時のなかに』（春風社）▽中嶋康雄『うそっぱちかもしれないが』（澪標）▽坂本久刀『時鳥啼く』（澪標）▽季村敏夫編『一九三〇年代モダニズム詩集』（みずのわ出版）▽安水稔和『辿る　続地名抄』（編集工房ノア）▽相野優子『ぴかぴかにかたづいた台所になど』（ふらんす堂）

⑦〈受賞〉時里二郎会長の詩集『名井島』（思潮社）が第49回高見順賞、第70回読売文学賞をダブル受賞した。

⑧〈詩篇〉「詩のフェスタひょうご朗読詩集より」▽「朝のうた」野中美千代▽「ひめ（寵姫）」李沙英

⑨〈報告〉常任理事会の報告

⑩〈会員の発行書／会員の詩誌〉

★第47号（2020年7月1日発行、8頁）

①〈総会〉第24回定期総会報告

新型コロナ感染防止のため4月7日非常事態宣言が発令され外出自粛要請が5月末まで続行ということで例年5月初旬に行う第24回定期総会の開催が危ぶまれた。集会を持つのは不可能になったため書面で決議事項を問う形となった。時里二郎会長は「兵庫県現代詩協会の２０２０年度が始まりました。ただ、新型コロナウィルス感染拡大をうけて、第24回定期総会が開けず、会員の皆様に総会資料を送付して、各議案を書面による承認決議事項の決済というかたちをとりました。やむをえぬ措置として、会員の皆様にはご理解をよろしくお願い申し上げます」と文面にて挨拶。

②〈報告〉②〈イベント〉第９回ポエム＆アートコレクション展の報告

今年度も1月16日から21日まで、会員の詩人が綴った詩とその詩に寄せたアート作品（絵画、書、オブジェ）を組み合わせた展覧会が神戸文学館で開催された。会期中、１９９名の来館者かおり、盛況だった。出品者数　１９名。出品者名　阿部由子・岩崎風子・大西隆志・大橋愛由等・和比古・高木敏克・玉井洋子・玉川惰香・寺田操・永井ますみ・西海ゆう子・坂東里美・福永祥子・牧田榮子・松下玲子・丸田礼子・水こし町子・山本彰子・山本眞弓の諸氏。

③〈講演記録〉時里二郎会長（写真）／報告者・北岡武司

新型コロナウィルスで世間が騒然となるまえ、特別イベントが開かれた。阪神淡路大震災記念日の翌日で、時里氏の講演も震災で受けた衝撃についての話からはじまった。震災で詩は死んだかにみえた、と語りだす。現実のひとつの限界を知ることは別の現実の地平へと人を高めるのかもしれぬ。それは認識と魂の高まりを産むのだろう。そもそも詩作にあって肝要なのは表現技法ではなく認識内容なのだ。表層の現実に身を置くかぎり、皮相な認識内容し、かえられまい。内容は詩人の立つ地平に応じて異なってくる。そして死を潜りぬけ、超えた地平に立ってこそ、命が生きはじめる。親しかったあの人は、六五〇〇人近くの人々は、「どこへ行ったのか」。皆、現実の外へと立ち去った。では現実とは何か。人間はなぜ現実のなかへと立ち現れ、去って逝くのか。……人間とは何か。「どこからきたのか」。これを問い続けると、ある日ふと死者の息づかいが感じられるようになる。死者との対話がはじまり、詩が命をうる。

震災のみならず、まえの大戦では日本だけでも三〇〇万人近くの将兵が死んだ。一九四五年三月一七日の神戸大空襲では七五〇〇名。東日本大震災、その後に続くツナミ……。多くの人が逝った。皆、どこへ行ったのか。あえて誰も問わない。しかしそれを問うことは別の現実、別の世界への思いを育む。また死者との対話が必ずしも妄想の産物ではないことに気づかせてくれよう。謂わば詩が死ぬことを通して詩は以前にも増して輝きをうる。それは詩人の魂の高まりに呼応して起こる現象であろう。人は言葉によって自分を作る。詩人も詩作することで自分を陶冶する。これに不可避的に伴う現象である。ひとつ気になったのは、「一行だけがじわっとくればよい」と言われたことである。それはそもそもいかなる立場での発話なのか。「よい」とは何に「よい」のか。残る疑問を余韻として講演は盛況のうちに終わった。

④〈読書会〉第17回読書会報告／「辻征夫について」チューター・時里二郎／報告者・山口洋子（別枠に表示）

⑤〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽『四角いまま』武内健二郎（ミッドナイトプレス）▽『完本　コーヒーカップの耳』今村欣史（朝日新聞出版）▽『野の棺』内田正美（澪標）▽『繋ぐ　続続地名抄』安水稔和（編集工房ノア）▽『耳凪ぎ目凪ぎ』たかとう匡子（思潮社）▽『おもちゃの馬』野口幸雄（澪標）▽『海のほつれ』神田さよ（思潮社）

⑧〈詩篇〉「詩のフェスタひょうご朗読詩集より」▽「びんずるさん」小田涼子▽「TOKIOララバイ」福田知子▽「その日」野口幸雄

⑦〈報告〉常任理事会の報告

⑧〈会員の発行書／会員の詩誌〉

④〈読書会〉第17回読書会報告／「辻征夫について」　チューター・時里二郎／報告者・山口洋子

時里二郎さんの魅力なのか辻征夫の魅力なのか、読書会始まって以来じゃないかと思える沢山の参加。いまなら新型コロナウイルスの〝３密〟で中止であっただろう。開口一番参加者の多さに思わず時里さんが「ちょっとプレッシャーを感じています」と笑いで始まった。

さて、読書会案内はがきにはチューターである時里さんの素敵な案内文があった。まずここで、参加しようと決められた方もあったのではないだろうか。その書き出し、《どうしてこんな簡単なことばで、人の心をさらっていってしまう詩がかけるのか》と。実はわたしは辻征夫の現代詩文庫の最初のものしか見ていなかったし、この詩人にあまり興味を持っていなかったので、というか難しそうな詩を書く人だなぐらいにしか読めていなかったので、この言葉に参加を決めたのだった。

時里さんと辻征夫の詩との出会いは、ずっと新しいとのこと、『俳諧辻詩集』だという。そのとき感じられたくいままで自分か書いてきた、自分の詩にはない自由な詩なのに心に残る。目から鱗が落ちたように思い、こんな詩を書く辻は最初はどんな詩を書いていたのだろう》と、遡ることにし、読み直し、面白かったと話を進めていかれる。

読書会なのでざっくばらんにお話したい、と資料の実際の詩を読みながら、懇切丁寧な解説。池井昌樹さんもそうだが、辻も十代の頃に自分は詩人になるんだと目覚めていたとか、そしてその原点があのリルケの「マルテの手記」の《問いを持ち続けること》の影響だったという。

資料は各詩集からのそれぞれ代表的な、あるいは時里さんが私達のだめに選んでくださった詩と同じく辻征夫の対談や雑誌からの「言葉」をコンパクトに引いてくださった①～⑥など。

『かぜのひきかた』までは寡作で詩集は少なく、『落日』と『かぜのひきかた』の間は八年空いており、そのあとは同じ年に二冊とか一年おきにとか爆発的に出版、そして最大のテーマである、辻征夫の詩はなぜ変わっていったのか、どう変わったのかを『落日』までの第一期と、『かぜのひきかた』からの第二期に分け分析、説明に入られた。

自分とは誰なのかという追求は一期も二期も同じなのだが、一期の、特に『学校の思い出』では、純粋だけれど。

あるべき自分というものをひたむきにそこに純化させようという、息苦しさで止まっている、若書きもある。『隅田川まで』の「夜道」「棒論」は追求は同じなのに、突き詰める方法はからっと変わる。自分の中をいくら掘り進んでも行き詰まってしまう、それよりも自分とは全く違うもの（他者）を置いて自分との距離感をそのもの（他者）と係わらせることによって自分の位置を確かめる、という方法を考えていった。他者を詩の中にもってきて、その距離感のなかで言葉をやりとりしながら、自分とは誰なんだろうと考えていくスタイル。対話の詩が増える。ひとり他者を入れることによって言葉のやりとりの中で詩のなかにふくらみが出て来る、と。そういえば「木」（『学校の思い出』）の、木は／最後まで木でなければいけない／のひたむきさと、「道」の　夜道で／犬と会った／「こんばんは」／「わんわん／　の、どこか和らぎのある書き方、時里さんの説明でよく分かった気になる。『かぜのひきかた』以降では詩に異質なものが出てくる。それも唐突に。そしてそれがその詩の流れを潰すのだが、詩が動き出すのだという。詩の世界を不安定にさせることも大切なのだ。第二期のテーマは滑稽さと悲哀だとも言及された。突然に出てくるくまごしろうどの》や《棒にも　棒の／過去があり》とかがそうかもしれない。私はこの読書会で耳から鱗が落ちました。〈第47号〉

★第48号（2020年12月1日発行、8頁）

①〈イベント〉「ふれあいの祭典・詩のフェスタひょうご2020」第一部講演会講師和合亮一氏

十月三日、新型コロナの影響で開催が危ぶまれたもののラッセホールにて「予定通り実施できたのは嬉しいことで一重に皆さまのご助力あってのことと感謝です。」と会長時里二郎の挨拶が始まる。限定数80名の参加者を得てJロナ対策も万全を期しマスク着用・検温・消毒を行い席のジスタンスも計り異例の措置で開幕できた。

第一部の講演は講師の和合亮一氏の来神叶わず、スクリーンで福島から同時配信の形で行ったが直に対面しているような臨場感が得られて好評だった。手元の資料に従って話が進み、表情も声も明瞭で分かり易く熱のこもった語りにみな引き込まれ熱心に聞き入って良い時間が流れた。司会は大橋愛由等で質疑応答も活発に行われ、演題の「QQQ～震災十年へ絶対的質問を巡って」に刺激を受けた。好評のうちに終わる〉

②〈講演記録〉『QQQ～震災十年へ、絶対的質問をめぐって』報告者・相野優子

③〈読書会〉第18回読書会は『和合亮一』の詩について　チューター大西隆志／報告者・野口幸雄

④〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽『朗読詩集　かなしみ祭り』玉川侑香（CD）▽『吹き抜けた時』辻岡真紀子▽『カツベン詩村映二詩文』季村敏夫編（みずのわ出版）▽『句集　止まり木』増田まさみ（私家版）

⑤〈報告〉常任理事会の報告

⑥〈会員の発行書／会員の詩誌〉⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮

⑧〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽芝本政宣『柴田実『神戸・姫路の画家たち』（神戸新聞綜合出版センター）▽牧田榮子『倉橋健一の詩を繙く』（澪標）▽紫野京子『霧の馬』（編集工房ノア）▽高木敏克『発光樹林帯』（澪標）▽高橋冨美子『夢泥棒』（思潮社）▽猪谷美知子『蝙蝠が歯を出して嗤っていた』（澪標）▽和比古『蒼き旅』（遊文舎）▽高橋冨美子『夢泥棒』（思潮社）▽猪谷美知子『蝙蝠が歯を出して嗤っていた』（澪標）▽和比古『蒼き旅』（遊文舎）

⑨〈寄稿〉「歌謡曲」田村周平

⑩〈追悼〉「谷田寿郎さん」三宅武

⑪〈追悼〉松尾茂夫さんの思い出「詩と煙草はやめられない」渡辺信雄〈別枠に表示〉

⑫〈詩篇〉「詩のフェスタひょうご朗読詩集より」▽「コロナの夏」山本眞弓▽「女が老いる―阪神・淡路大震災から考えたこと」西海ゆう子

⑬〈会員の発行書／会員の詩誌〉

★第49号（2021年7月1日発行、8頁）

①〈挨拶〉新役員体制のスタートにあたって―時里二郎会長

②〈報告〉第25回定期総会（書面）報告

③〈新役員〉（2021年度～2022年度）▽会長＝時里二郎▽副会長＝神田さよ▽事務局長＝山本眞弓▽会計＝玉川侑香▽常任理事＝大西隆志・大橋愛由等・和比古・北野和博・高谷和幸・野口幸雄・福永祥子・丸田礼子▽理事＝安西佐有理・梅村光明・渡辺信雄▽監事＝中嶋康雄・福田知子▽顧問＝たかとう匡子・安水稔和（継続）

④〈読書会〉『石牟礼道子の作品について』チューター：丸田礼子／報告・青木左知子

⑤〈報告〉第10回ポエム&アートコレクション展

⑥〈講演記録〉特別イベント　講演会　報告：武内健二郎演者―時里二郎「詩を書くということ―第2回」神戸文学館

⑦〈文学紀行〉第7回文学紀行《姫路文学館・姫路城周辺をぶらり歩き》―報告者・浜田多代子

《姫路文学館・姫路城周辺をぶらり歩き》2021年3月14日

④〈読書会〉『石牟礼道子の作品について』チューター・丸田礼子／報告・青木左知子

新型コロナ拡散第三波の只中にも関わらず、『苦海浄土』に導かれて２７名が参集した。

丸田礼子氏は読書会担当で、チューターを依頼する立場ながら、コロナ禍中にあることを慮り、自らにその任を課しての登壇となった。石牟礼道子には以前から強く心惹かれていたが、存在の大きさに圧倒され、読み方を誤りはせぬかなどの恐れから、その作品を取り上げるのを躊躇していた。が、百人の読者がいれば百通りの読み方があって当然、異なる読み方の中で真摯に語り合えればと『苦海浄土』を取り上げることにしたと述べて本題に入った。

まず年譜を説きながら『苦海浄土』執筆へ石牟礼を突き動かした力とそれを書き得た資質が幼少時の環境や体験に基づくことに触れ、特に視力を失った上に精神をも病む祖母に寄り添った日常を、エッセイ「愛情論」の中の切々たる言葉を引いて紹介された。また、自分を可愛がってくれていた近所の若い遊女の惨死という凄まじい出来事など、切り裂かれた人間世界の様々を幼くして体験したことが、後々、水俣病患者やその家族たちの痛み苦しみへの強い共感に繋がっていったという。石牟礼は八歳のとき家の没落によって水俣川河口の村に居を移すが、すぐ近くには渚があり、そこでは自然、生き物たちとの深い交歓を体験する。それが豊かな詩情の原点となったともいう。人の世のおぞましい出来事の見聞と、渚での自然界との親密な触れ合い、この言わば相反する体験が融合して、弱者への共感性、『苦海浄土』を書き上げる力となったのであろう。

話題の中心は第三章「ゆき女聞き書」に置かれた。この章が第一・二章より先に書かれ、ここを原点に作品世界が広がっていったことによる。資料として示された患者やその肉親の心情が、丸田氏の、朗々と、だが哀切に満ちた声調で強く聴く者の胸を突いた。だがそれは彼らの言葉ではないことを知らされる。ここに登場するのは言葉を奪われた人々だからだ。その語り得ない人間の声を如何にして聞きとるか、それが重要と氏は強く説かれる。石牟礼は通りかかった病室の半開きのドアから自分に向けられた見えない日の中に決して往できない魂魄を見る。そしてそれが全部自分の中に移り住んだと本書で述べている。つまりこの釜鶴松の心情も坂上ゆきの言葉も、冒された者に成り代わっての石牟礼の声なのである。筆記具を持ち、録音機を携えて患者たちの許を訪れたのではなく、それとなく静かに相手に触れてその心の内に入り、その人に成り代わって語っている石牟礼の言葉なのだ。故に、ここには記録ではない、文学としての『苦海浄土』かおるのだと強い口調で語られた。

〈会報 49 号〉

⑪〈追悼〉松尾茂夫さんの思い出「詩と煙草はやめられない」渡辺信雄

松尾茂夫さんが4月1日に逝去の報を永井ますみさんから受けた。松尾さんには40年近いお付き合いでお世話になった。個人的な思い出だが、私の初めての詩集『冬の日の私信』（1984、摩耶出版社）ができて、その本を我が家まで運んでくれたのは松尾さんだった。初の神戸現代詩叢書シリーズでもあり、喜びを共有した。その後は現代詩神戸研究会の「神戸詩画展」や「神戸市街図」の刊行でご一緒した。何事もたんたんと気張らないで、事をこなす人だった。

私か仕事の関係で事務局をしていた「第10回神戸ナビール文学賞」を、詩集『デンキブランで見た夢』で受賞されて、加古川の喫茶店でインタビューした。その時の雑誌をみると、写真は煙草を燻らしていて「詩と煙草はやめられない」と書いている。また、「熟成の語り口の十冊目モダニズムからリアリズムへ、物語性もつ詩」という見出しをつけている。詩集タイトルの「デンキブラン」とは、浅草にある神谷バー発祥のカクテルで、琥珀色の酒。明治、大正から文壇の人達にも人気があったという。その酒のポケット壜を松尾さんから頂き、飲んだ記憶かおる。「デンキブランの夢」の詩は、「元町2丁目あたりに　デンキブランが売物のバーがあった」という。そこに登場する三鬼の愛弟子の編集者や宇宙食を研究する大学教授の話だが、妙なリアリティーがあった。排便からクロレラを作る想像力のユーモアに松尾さんの人間性を感じた。

輸入品の仕入れなどの仕事をされていたようで、ウイスキーなど洋酒にも詳しく、商売のやりとりのエピソードが詰まっていた。

1937年生まれで戦争体験もあり、もっとお話しを聞きたかった。「現代詩神戸」や「別嬢」に詩やエッセイを書き、兵庫県現代詩協会の会長（事務局長を経て）など、詩と詩人の交流と運動に尽力された。また加古川を中心として「播磨灘詩話会」をつくり、同人誌の垣根を超えて、詩の書き手を育て交流をめざす貴重なリーダーであったようにも思う。年譜を見ると「54歳で事業を清算し以後定職につかず」とあり、自由大として詩人の活動を続けられたのだろう。松尾さん、天国で好きな煙草を吹かし、ウイスキーを飲みながら、詩を書いてください。

〈第49号〉

⑤〈追悼〉「春名純子さん追悼」中堂けいこ

最後の電話は三冊目の詩集出版の話でした。そしてそのまま互いの都合でとだえてしまいました。親子ほどの年の差を越え、貴姉は常に詩の友人でした。と、過去形で書かねばならないのはさみしいかぎりです。

貴姉は若き日に、港野喜代子さんの薫陶をうけられ、後に灌木の高橋徹さん、貞久秀紀さんに師事。早くに詩学の新人に選ばれ、詩集『風屋』『猫座まで』を上梓。現代詩神戸の同人でした。

「私は詩のことばと共にある。」と、一行からの詩句を胸にだきしめ、愛について生死について、記憶の風景をひたすらことばにのせる、その詩の紡ぎ方を独自の表現方法で獲得されました。豊穣な詩世界への憧れと情熱を持ち続けた詩人春名純子さん。どうか安らかにおやすみください。

飛べ　御影石の船　マンタのように
舳先には十字の紋章をかざして

（『風屋』「海のレクイエム」部分）

〈第50号〉

★第50号（2021年12月1日発行、8頁）

①〈イベント〉「ふれあいの祭典　詩のフェスタひょうご2021」が10月3日神戸市教育会館大ホール（神戸市中央区）で開催された。この日はコロナ感染拡大緊急事態宣言解除されたばかりで開催が危ぶまれたが、なんとか開催にこぎつけることができた。最初に時里二郎会長から「紆余曲折を経てここに皆様と共に一堂に会することができたのは一重にみなさまのご協力の賜物と深く感謝申しあげ、これからの講師のご講演と詩の朗読を共に楽しみましょう」と挨拶。第一部は高階杞一氏による講演。テーマは「詩とは何か」。冒頭ギターを演奏しながらフォーク・クルセダーズの「戦争を知らない子供たち」を披露。第二部は自作詩の朗読。13名の参加があった。

②〈講演記録〉高階杞一氏の講演「詩とは何か」／報告者・福永祥子

開口一番、高階杞一氏はギター一本しかも生音で「戦争は知らない」（作詞・寺山修司）を沁みとおるような歌声で唄ってくださった。70名前後はいただろうか、参加者たちの心がスーと一つにとけ込む瞬間だった。

高階氏は終始穏やかな口調で淡々と語ってくださる。それでいて「ポツン、ポツン」と何か一心にきいている私達の心の深い処に灯りがともされていくようだった。

詩を書くきっかけは「三好達治」の詩に影響を受けたことなど率直におっしゃった。嬉しかった。私も「太郎を眠らせ」のあの二行詩が大好きで今でも諳んじると涙が出てしまう。

さて、本日の演題は「詩とは何か」―一瞬の間があってかれははっきりとした口調で「詩とは一言でいえば「発見と飛躍」ですと。それから一人ひとりの心をゆっくり解きほぐすように、事前に配布されたテキストに添って話を進めていかれた。

これは詩だと念いますか（改編）

今朝ぼくは　今朝ぼくは／いつもより早く　いつもより早く／起きて　起きて／学校へ　ぼくに／行きました
会いました／八時前に　二十年前の／学校に着きました
ぼくに会いました

こうして当日のテキストを書き写してみると、「詩とは何か」「えっ何だろう？　そういえば何となく詩のようなものを書いてはきたが――」と自問自答している私と出会う。でもそれ以上、私はこの二編、改編とを読み比べながら、高階氏からは「ひとつの答え」以上に大きな「発見」を頂いたような気がした。まさしく詩という言葉の領域を越えて高階氏の肉声と直に向き合っていると「詩の本質論」よりも深い実感を味わうことができた。

「詩を書き続けるための何かヒントのようなものが教えて頂けるかしら？」と参加したけれど、そんな表層的な思考吹っ飛んでしまった。

当日、参加者に配ってくださってテキストの詩を一編一編優しい声で読まれながら、一つの言葉に宿るなんとも優しい風景が日の辺りに浮かんでくる。

「雨になる」たちあがっても雨　ねころんでも雨／「雨」
どんなにいっぱいの悲しみが　君を降らせているのか／「茫洋」　ハサミで夜を切っていく　菱形、三角、ギザギザ、むちゃくちゃそんなふうに　ぼくらも教わった

資料から私が無性に惹かれた高階氏の詩のフレーズを書き出してみた。こうして何度も読み返してみると「詩とは何か」の問いに私自身は明快に答えられないが、やはり心の深い処にポツンと灯りがともされる。

空への質問　ここに今ぼくのいる意味は／ここへ　ぼくを呼んだのは　なんですか／なぜですか／この広い宇宙の中で
ここに今　ぼくのいるのは　ぼくは／なぜですか
なんですか／なんだろう　〈「高階杞一詩集　空への質問」より〉

③〈読書会〉第20回読書会『高階杞一の作品について』神戸市教育会館　8月1日／チューター・神尾和寿／報告者・黒田ナオ（別枠に表示）

④〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽和比古「モザイクの空」（土曜日美術社出版販売）▽黒田ナオ「ぽとんぽとーんと音がする」（土曜美術社出版販売）▽牧田榮子「わたしの絵本ノート」（澪標）▽▽今村欣史「縁起小墓回満地蔵尊」（小墓回満地蔵尊奉賛会）▽森田美千代「片道切符の季節（めぐりあい）」（澪標）▽山本眞弓「ティータイム」（澪標）

⑤〈追悼〉「春名純子さん追悼」中堂けいこ〈別枠に表示〉

⑥〈報告〉常任理事会報告

⑦〈詩篇〉「詩のフェスタひょうご朗読詩集より」▽「F君のこと（部分）」田中信爾▽「メダカ」濱田多代子▽「部屋（部分）」阿部由子

⑧〈会員の発行書／会員の詩誌〉

③〈読書会〉第20回読書会『高階杞一の作品について』神戸市教育会館　8月1日　チューター　神尾和寿　報告　黒田ナオ

高階杞一さんの詩は春のモンシロチョウみたいだな、て思っていました。軽やかで可愛くて、ひょいと簡単に手で捕まえられそうな気がするのですが、実際に捕まえようとすると、すうっと指の隙間からすり抜けてしまって、気配だけは残されているものの、なかなか上手く捉えることが出来ないのです。

そこがまた、高階さんの詩の魅力でもあり、わかりやすい口語で書かれていることが多いので、すぐに理解してしまえそうな気になるのですが、わかっているようで、なんだか少し訳がわからない。でももちろん、心の奥には、しっかりと何かの気配が残されています。

そんな謎めいた高階さんの詩を、高階杞一さんとは長いお付き合いのある神尾和寿さんが、解説してくださるということで、楽しみに出かけて行きました。

高階さんといえば、わたしは詩集を何冊か読ませていただいたものの、ご病気で幼いお子さんを亡くされた、ということしかよく知らなかったのですが、神尾さんが年譜をもとに時間の経過に沿って説明してくださったので、それぞれの詩集が、高階さんのどのような気持ちの中で書かれたのかがよくわかりました。

高階さんが大学では農学部で勉強されていたこと、また日本万国博覧会記念協会で造園技師として働いておられたことなど、全く知らなかったので、びっくりしました。造園と詩を書くこと、なんだか面白い組み合わせだなあと思いました。全く違う世界のようでいて、なんだかちょっと共通している部分もあるような気がします。もしかしたら庭を造るような感じで、詩集も編集されているのでしょうか。

「キリンの洗濯」という詩の最後の部分で、「窓から／洗いたての首を突き出して／じっと／遠い所を見ているキリンが見える」というところなんてまるで、造園技師がどこか少し離れた場所から俯瞰して、自分の詩を見ながら書かれているような気がしました。そして、高階さん自身もキリンのように長い首を傾げながら、「あれっ、どうして僕はこんなところにいるんだろう」と、ぽかんとしているみたいな気がして、読んでる私も、ふふふっと笑ってしまいます。

神尾さんの解説によると、高階さんの詩が多数の読者を獲得される理由のひとつとして、独りよがりにならない客観的視座、素直さ、開放性にある、ということでしたが、それこそが造園技師の俯瞰した目線にあるのかもしれないと思いました。

高階さんは、詩の推敲をかなり何度もされると聞いたことがあるのですが、それも植木の枝の剪定作業のようなものかもしれません。そうやって巧みに剪定された詩の言葉たちは、ユーモアがあり、それも適度に刈り込まれているため、モンシロチョウのように軽くひらひらと、読む人の心の中で自由に飛びまわっています。

神尾さんの言葉によると、高階さんは「いつも型にはまらず、新しい可能性を考えて、新しい詩をつくり、詩集をつくる」ということです。造園技師の仕事から、ご自分で出版社を作られ、大学の講師をされるなど、次々と新しい世界に挑戦される高階さんの詩には、神尾さんの解説によると「当たり前となっている日常生活が実は不思議である「深淵にさらされている」ことに目覚め、さらに、その衝撃をいかに展開していくか」という思いが表現されているそうです。

そんな高階さんは演劇の脚本を書かれたり、四元康祐さんの写真とコラボして詩集を作られたり、松下育夫さんとの共著の詩集を出されたりと、ますますいろいろなことに挑戦されているように思います。そこのところについては十月にある講演会で高階杞一さん自身の言葉として、さらに詳しく聞かせていただきたいと思いました。

神尾さんのお友達ならではのユーモアたっぷりなお話はとても楽しかったです。どうも有難うございました。〈第50号〉

兵庫県現代詩協会　会報第53号　特別付録
会報バックナンバー④

■発行所＝兵庫県現代詩協会事務局《野口幸雄》
〒657―0846 神戸市灘区岩屋北町4―4―5―902
Tel.090―7963―0090
▽発行人＝《時里二郎》（兵庫県現代詩協会会長）
▽会計＝《玉川侑香》
▽会報特別号・責任編集＝《大橋愛由等》／編集協力＝《安西佐有理》
■印刷＝《遊文舎》〒532-0012 大阪市淀川区木川東4―17―31 Tel.06―6304―9325
■編集あとがき＝兵庫県現代詩協会が発行する会報54号の特別付録「会報バックナンバー④」です。38号から50号まで収録しています。この会報を発行している期間中、新型コロナウィルスの蔓延があり、その予防のために社会活動が大きく制限されました。本協会の活動も年に一回の総会を書面ですますなど大きな影響を受けました。さてこの会報バックナンバー（ダイジェスト版）の編集作業は今号でひと区切りです。こんごあらたにをバックナンバーを作成するのかどうかについては次代の会員諸氏に任せるとして、これまで協会の会報に文章を寄せていただいた会員の皆さんと編集を担当した方に感謝しつつ、筆を置くことにいたします。（大橋記）